

訂校新撰國語讀本 卷四

4a
810
大10

41510

教科書文庫

4
810
41-1921
20000 67665

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

日八月二十年十正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

42
810
大10



訂校 新撰國語讀本 卷四目次

- 一 佛濱の月夜……………一
- 二 詩二篇……………五
 - 一、無人島
 - 二、椰子の實
- 三 海と岩……………九
- 四 學問の趣味……………一一
- 五 ことば……………八
- 六 史前の人類 上……………二二

目次

訂校 新撰國語讀本

文學博士佐々政一編

大町芳衛
武島彦郎
杉敏介
補修

株式會社 明治書院

七	史前の人類 下	二六
八	わが歌	三三
九	晩秋	三五
一〇	秋 郊	
	一、月を帯ぶる白菊	
	二、富士雪を帯ぶ	
一〇	冬枯の林	三八
一一	蘇武	四五
一二	武士氣質	五一
一三	形	五七
一四	自恃	六四

一五	アルプ山越 上	六八
一六	アルプ山越 下	七九
一七	辛抱くらべ	八五
一八	南洲遺訓	九二
一九	山口峠の危難 上	九六
二〇	山口峠の危難 下	一〇五
二一	運命 上	一一〇
二二	運命 下	一一八
二三	乃木將軍	一二三
二四	意志の力	一三〇
二五	門生に諭す	一三七

二六 金米糖の壺……………一四一

二七 俳人一茶……………一四七

二八 嫩草山……………一五五

二九 自然の愛……………一五九

三〇 望軍臺……………一六四

卷四目次終

校訂新撰國語讀本卷四

一 佛濱の月夜

銚子の市街を過ぎて、町はづれなる川口神社の丘に登る。ここは、大利根の海に注ぐ處なり。河の幅いと廣く、對岸には寸馬往き、豆人來る。左に銚子の瓦鱗を見渡し、右に鹿島の荒灘を望み、白帆遠く風を孕み、櫓聲近く呷軋として聞ゆ。

祠の後より高原を横ぎりて黒生濱に下り、磯づた

ひに君が濱を経て犬吠が崎に登り、地藏坂を下りて佛濱に至れば、日ははや西に沈みぬ。此處に旅館あり。曉雞館と云ひ、快哉樓と云ひ、御風館と云ふ。犬吠が崎を左にし、長崎が鼻を右にせる、一曲の海濱の長さ十町ばかりの間、旅館より外には家なく、後には小松生ひ續きたる高阜を負ひ、前は直に俯して海波に臨み、自ら別天地を爲せり。曉雞館に投ず。

時は九月十一日、恰も陰曆八月望日に當る。浴後、欄によりて海上を見渡すに、萬里渺として雲なく、暮色やうやう波聲を罩めたれど、日は未だ全く暮れず。犬

吠が崎の燈臺も未だ點火せざれば、月の出づるには猶程あらんとて、暫く眼を他に移ししが、ふと東の方を見れば、團團たる明月いつしか海を離れたり。離ること數尺、未だ光線を放たず。海は碧に、空は青く、水天蒼茫の間、月ひとり紅玉を懸く。月やうやく上りて漸く小となり、波光遠く月に輝きて、萬里金沙を散し、沖に釣する漁舟四つ五つ、いとさやかに見ゆ。

白帆金波の中に入りて、忽ち見え過ぎてまた消ゆ。月、天に沖するに及びて、流光際なく、帆影また隱るる所なし。燈臺の火光廻轉する毎に、西に明かに、東に消

ゆるは、月光と相闘ひてその光を失へるなり。満潮の刻は過ぎたれども、濤はなほ磯に高く、海風は軒近き岸の姫松に颯颯の音をなせども、流石に枝上幾百顆の月影をこぼたず。松蟲・鈴蟲・蟋蟀の聲聲も、殊に秋氣を添へて冷かなり。

起ちて濱邊に下る。巖礁の散布せる邊を、濤と路を争ひつつ、犬吠が崎を後にして、飄然として歩すれば、月はわが顔を照し、風はわが袂を翻す。右は松丘自然の屏障を作り、左は大洋渺茫としてその際を知らず。水陸の間ただ我が身一つを點ぜり。顧みれば旅館影

を没して、樓上の燈光星よりも瘦せたり。大町桂月

二 詩二篇

一、無人島

我は、これ、大渡津海の名無し小島。

人住まず、草木も咲かず、

寄せくるは、ただ荒浪。

たまたまに、旅ゆく小鳥、

疲れたる翼やすめて、

憩ふ日の無きにあらねど、
たちまちに翔りも去りて、
再びは還り來らず。

我は、これ、大渡津海の名無し小島。
わがよるこび、
わがうれひ、
知る人もなし。
寄せくるは、ただ荒浪。(阪田泰雄)

二、椰子の實

名も知らぬ遠き島より、
流れ寄る椰子の實一つ。

ふるさとの岸を離れて、
汝はそも浪に幾月。

もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ蔭をやなせる。

オトシテ
ワレテイル

われもまた渚を枕(浪ヲチヤハテ枕ス)

ひとり身の浮寝の旅ぞ。

フライ田心ヒラレテ
衣ヲシテ乗ル

實をとりて胸に當つれば、

ニ傷チオコル
(カシカフテ是ヲ受ル)

あらたなり、流離の憂。

故郷ハハナレバナレニオフク
カナレニ

海の日の沈むを見れば、

たぎり落つ、異郷の涙。

トメドモオチテケル

思ひやる八重の潮路、

いづれの日にか國に歸らむ。(島崎藤村)

三 海と岩

空は次第に紫色に濁りて、生温き南風面を吹きぬ。

漁夫等が濱に走り出で來りて、忙はしく網を收むる

ほどに、雨ばらばらと降來りぬ。

雨はやがて止みぬ。風は愈吹募る。眼を上ぐれば、墨

をちらせる、インキをぼかせる、紫色に汚れ、銀色に朧

に、様様の態を盡せる雲、満天に染み、融け、渦まき、富士

も天城も隠れぬ。

(三) 相模國三浦郡逗子町の沖合にあり。

すごきまで黝然と暗める海は、さながら力士の怒れるが如く千丈の底より鳴り吼えつつ、一波又一波、岩を乗越え、濱を呑み、断えず休まず、鞆鞆として陸を目がけて押寄す。
見渡せば海に一の帆影なし。唯大鷲の嘴をあげ翼を張れるが如き名島の孤岩の、獨り大濤をかぶり、白煙を蹴散しつつ、屹として萬波の海の中に立つあるのみ。

ああ海よ、爾の怒は偉大なり。されど、ああ、岩よ、爾の意力も亦偉大なり。古の大人も曾て爾が如く天を仰

(三) 相模國三浦郡逗子町にあり。
(三) 北條時宗。

ぎて永遠を思ひ、一世を敵として孤高の戦を續けたりき。

風は猶止まず、海は益々哮りぬ。千波又萬波、碎けても碎けても、又寄せ來る。彼方の海上に斗出して、剛健素朴、褐色の衣を着けて一點の青を帯びず、どつかと腰を据ゑて攻寄する海に向ふ。小坪の岬を見ずや。人をして當年の相模太郎を想はしむ。(德富蘆花―自然と人生)

四 學問の趣味

藝術を賞翫することは、素より専門家に限つたこ

とではない、寧ろ其の賞翫は一般素人のことである。深く學問を研究して、其の蘊奥を極めることは固より學者に屬することであるが、趣味として之を賞翫するは、同じく一般素人のことである。然るに日本人は概して書畫・骨董を愛玩する心はなかなか深いが、學問に對する趣味はあまりに乏しい。西洋人は固より各種の美術を愛玩するが、學問に對しても亦頗る深い興味を持つてゐる。或は實業家にして博物學に興味を有して、立派な著述をする者もあるし、或は外交官にして歴史・地理・言語・博物等に興味を有して、其

* Authority.

一廉
一廉
一廉
一廉
一廉

の任地に於けるこれ等の事項を研究し、本國に歸つては、それ等に關する一廉のオ*ーソリテイ*となる者も少なくはない。之に反して、日本人の間には、専門の學者以外に學術的研究をしてゐる者は殆ど無いといつてもよい。もし専門の業務以外に多少の趣味ありといふならば、それは書畫・骨董・音樂等、藝術上の趣味に限られて居る。

専門家にあらずして學問を楽しむといふが如きは、一種の道樂に過ぎないのであるから、此の道樂がないからといつても、勿論、咎め立てをすることは出

來ない。併しながら、斯かる道樂は誠にあつて欲しいものと思ふし、また此の種の道樂がない結果として、日本の學問の進歩に影響を及ぼす事がないとはいへない。素人に學問を賞翫する風があると、自ら學者の事業を諒解し、之に對する同情が湧出る。大美術家が世に出たり、美術が盛になつたりするのは、之を保護したり賞翫したりする者の多いのに因るので、學問を樂しむ者が世間に多ければ、それだけ學問の進歩を促す事になる。日本に於ける學問の進歩の顯著でないのは、單に學者の努力が足りないのみでなく、

素人の間に學問を樂しむ風がないのにも因ると思ふ。近年我が美術の大いに發達したのは、相當の保護者が出て來た事に因るのであつて、而も其の保護者は之を美術の賞翫者の間に見出すのである。學問の賞翫者が多くなつて、之を保護する様になつたならば、其の進歩には著しいものがあるであらう。

學問の進歩は、學科によつては、設備・機械等に関係あるが爲に費用を要することが多い。若し篤學の人を保護するものがあれば、其の學問の進歩を促すことも隨つて頗る大いなるものである。西洋には美術

家を保護する者があると同時に、學者を保護するものも少なくない。かくて彼に於ては學問は益、進歩する。されば學問を賞翫するといふ道樂は、其の影響する所、頗る大いなるものがあるといへる。

學問を楽しむ風のないのは、單に學問の進歩の爲に遺憾であるのみならず、社會の風尚を高める上にも残念な事である。我が社會に、幾多、道德風紀上の缺點あるが如きは、茲にも原因が伏在する。又前に述べた、實際家にして著述をなす者のないといふが如き、實は學問に興味を有せざる所より起る。かかる人は

長く實地の業に従事して居つても、只、年年歳歳同一の事を繰返して、其の間に知らず識らず熟練を積むと云ふまでであつて、或は自ら考へたり、或は書物に諮つたり、或は人に尋ねたりする事をしない。それ故に學問に興味のない人は、何年同じ事をして居つても、進歩・發達の機會を捉へ得ない。即ち學問鑑賞の習慣なきは、常に他人を益せざるのみならず、自身も損する所が少なくないといはねばならぬ。

(澤柳政太郎—隨感隨想)

五 ことば

奇なるものは、ことばなり。茶碗とは茶事に用ふる碗の義にて、日本にて未だ良き陶器の出来ざりし頃、舶來の陶器は茶事にのみ用ひしより、かかる名を負はせたるを、今は茶を呑むものを殊更に茶呑茶碗などいふも可笑しからずや。珈琲茶碗などの名も奇しき限なり。

湯呑は湯を呑む器なるに、酒呑は盃のことにはあらで、酒を呑む人間なり。太刀持は太刀を持ちて主人に従ふに、太刀執は太刀を抜きて罪人の首をはぬ。蠅

取蜘蛛は蠅を殺せど、火取蟲は火に殺さる。

金持は自分の金を持ち、袋持は他人の財袋のみかつぐらんを、弓取は自分の弓を執つて人間の櫻木と謠はれ、草履取は他人の草履を摺む。理窟のなきは、ことばなり。

「ちやまが」かだら「などいへば、片言とて誰も笑へど、正しき語にもこの類あり。古は「あらたし」といひしを、今は「あたらし」といひ、「いとほし」といふ語も、元祿頃には、常に「いとほ様や」などいへり。「大つもごり」の「つもごり」も、古は「つごもり」なりけり。

「なりけり」の「けり」を現在にも用ふることありといへば、初學者は異様にも感ずべけれど、今の口語にも、失ひし物を探し當てたる時に、「ここにあつた」と過去にいふは、實は、今現に有ることなりけり。

「あるけれど」の「けれど」は、「美しけれど」の「けれど」にして、形容詞の語尾を動詞に續けたるなり。さるにても「ありけれど」は過去にして、「あるけれど」は現在なるも、奇なりといへば奇なり。

「まきもくの檜原もいまだくもらねば、小松が原に淡雪ぞふる。」
（新古今集、大伴家持）

* まきもくの檜原もいまだくもらねば、小松が原に淡雪ぞふる。
（新古今集、大伴家持）

を「の義に屢用ひたり。されば同じ語も全く正反對なる意味をさへ表すことあり。かへすがへすも奇なるものは人間の「ことば」なりけり。

六 史前の人類上

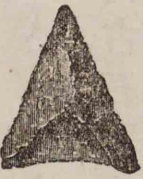
歴史の始まる前の人類も、歴史あつて後の人類も、人類たる靈能は同じであつた。人類はその形を地上に現した當初から、萬物の靈長たる力を具へて居た。彼等は自然の壓力に對して頗る勇悍なる抵抗を示した。世界の氣候も光景も今日と全く違ひ、今はその

*Mammoth.

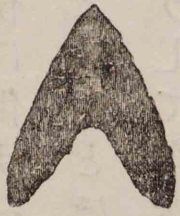
種類の全滅した動物が、なほ地上に彷徨して居た時にも、人類は既に存してゐた。而して他の動物が地氣天候の虐待に堪へず、影を地上に絶つた後も、人類だけはその存在を續けた。人類學者の所謂古石器時代にも、人類は、今は既に亡び盡した動物と共に住んで居た。歐洲では、この時代の人類は、モス巨象・モス穴熊・野馬・馴鹿などと共に生活してゐたのである。

人類は、地上に現れた時から、言語と云ふ、他の動物のもつて居ない、最も有力な交通機關をもつて居つた。言語は、恐らくは、人類の間に生れた最初のしかも

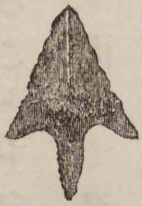
最大の發明であらう。之に依つて、人類は動物の状態



矢



根



石



から超脱し得べき道を開いた。之に依つて共同生活は始まつた。

人類は、又古石器時代に於て、既に手足の用に代へるべき機械を用ふることを知つて居た。彼等は碎け易い燧石を以て、簡單な器具を作つた。所謂矢の根石を作つて、戦闘若しくは狩獵に従事した。時としては、燧石の外に、動物の骨・角・牙その

他の物質を以て、平和の器具若しくは武器を作った。彼等は、此の時代に於ても、人は器械を用ふる動物たることを自證した。

而して又、當初から動物を飼ひならして、自己の使役に供すべき活動を始めた。古石器時代に於ても、犬と馴鹿とは既に家畜として人類の伴侶になつた。斯うして自然界の征服は先づ動物界から始まつた。

されば人類の最初の生活は、狩獵と漁業とであつた。古石器時代の人類は獵師若しくは漁夫であつた。而して普通、土を穿つた穴又は岩窟に住んでゐたが、

或地方には泥又は蘆で造つた小屋に住んだ痕迹もある。加之、已に彼等は生きる爲にのみ働く單純なる動物では無かつた。彼等は此の時代に於ても、生活上の高い趣味を持つてゐた。彼等は骨や象牙に物の形を彫刻した。彼等の彫刻した物體は主として動物の形であつた。馴鹿を刻んだのもある。巨象を刻んだのもある。藝術は遠く開闢時代から起つた。

駸駸として進んで已まない人類の進歩、人智の開發は、古石器時代の末に、驚天動地の大發明を生んだ。この大發明は、言語の發生のやうに自然的に、さうし

て徐徐として完成したものではない。忽に生れて、忽に世界の光景に大いなる變化を與へたものであつた。それは外でもない、即ち木燧を以て火を造ることの發明であつた。この發明と共に、古石器時代は去つて新石器時代が來た。

七 史前の人類下

古石器時代から始まつた、野獸を征服して家畜とする運動は益、その歩を進め、牛も馬も羊も雞も、此の時代に於て野性を失つて、家畜になつた。これが爲に、

(一) Clan.
(二) Tribe.

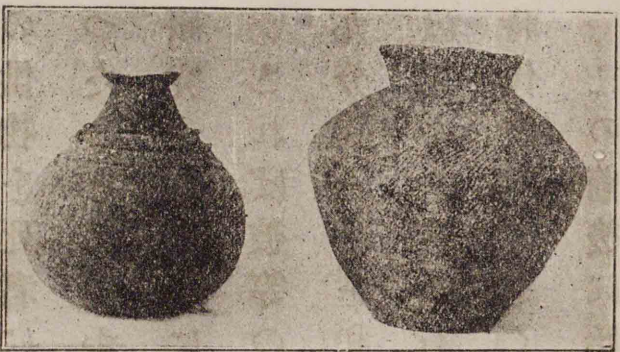
獵夫の多數は變じて牧者になつた。

新石器時代に於ても、人類の多數は牧者であつたから、依然として漂泊の生活を營んで居た。族若しくは種族として、水草を逐つて地上を徘徊するのが、彼等の生活状態であつた。

さりながら、斯うした漂泊の生活の間にも、彼等の進歩は止まなかつた。彼等は動物界を征服して家畜に化せしめたと同じ手段で、植物界を征服して人間に隸屬せしむべき運動を始めた。彼等の努力に因り、野草は化して小麥・大麥・燕麥・米になつた、多くの蔬菜

は出來た。人類は始めて土地を利用し、家を建て、土城を造つて、土着の生活を營んだ。

又、古石器時代には見ることを得なかつた陶器がこの時代に現出した。これは全く、木燧の發明から生れた火の力であつた。而して火の力は更に進んで鑛物界を侵し、銅が始めて人類に利用せらるるに至つて、石器の時代から漸く銅の時代に移つた。しかし銅は柔かい鑛物であるから、銅で造つた器具は、其の効用が必ずしも石器に優るのみでは無かつた。されば銅の時代には石をも併せ用ひたが、その石器は精巧



に磨き立てたものになつた。

古石器時代に於て死者を葬つた形迹を見れば、その時代の人類が來生の存在を信じて居たと思はるべき何等の形式もない。その時代に於ては、人類は生活の爲に奮闘し續け、周圍に對する應接の爲に忙殺されて居たから、未だ自

覺の念に乏しく、従つて個人感が起らず、來生などに思ひ及ぶべき機會がなかつたのであらう。然るに新

石器時代に至つて生活に餘裕を生ずると共に、個人感が生じ、死後の生活をも考へるやうになつた。種種の供物を死者に獻げた迹を見れば、來生の信仰があつたことは明かである。かくして人は始めて思索し研究する動物になつた。

されば彼等の進歩は日に益速かである。彼等は銅九分、錫一分を和して青銅とすることを學んだ。青銅は銅より堅い。石器は茲に於て無用に屬した。石器の時代は遂に全く去つて、青銅の時代が來た。

この前後に、始めて都市が建設された。都市は文明

の倉庫である。文明は都市に依つて涵養された。人類の政治的生活は始まつた。而して之と同時に、文字が人類の間に行はれるやうになつた。

言語の發明、木燧の發明、文字の發明は、人類の三大發明と謂つべきものである。言語の用は、文字の發明に因つて、廣く且つ大きくなつた。同情の區域は之が爲に極めて廣く、同情の熱度は之が爲に極めて高くなつた。政治社會は始めて動かすべからざる基礎を得た。

最初の文字は、今の亞米利加インド人の用ひて居

るやうな畫文字であつた。次に謎繪とも云ふべき會意の文字を以て、想像若しくは音を示すやうになつた。而して後、進歩の幾階段を経て、今のやうな音字に達した。

文字の發明の後に、人類は更に進んで、遂に鐵を用ふるに至つた。銅の時代は去つて、鐵の時代が來た。西紀前一千五百年代には、西亞細亞の人民は既に鐵を用ひて居た。而して吾吾現在の人類も亦依然として鐵器時代にあるのである。(山路愛山「東西六千年」による)

八 わが歌

落合直文

わが歌の見すべき

ものはあらねども、

松風きよし、

笛もちて訪へ。

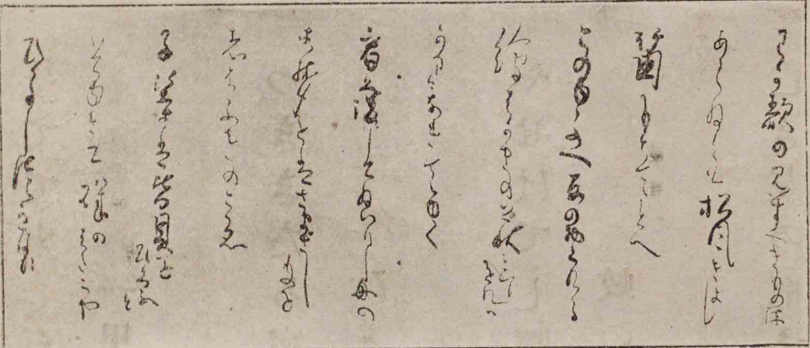
賤の男がすげの

小笠に風見えて、

雨ななめなり、

小田の細みち。

わが歌の見すべきものはあらねども松風きよし笛もちてとへ
このゆふへ友のおくれる繪はかきの萩みてなればかりなきてゆく
看護してねいりし母の御夢なほさまさしものなしはふきのこゑ
子等は皆貝をひるふといひゆきて磯のはたこやひるしつかなり



落合直文筆蹟

すてて來し石を再び思ひ出でて

一里もどりぬ、こゆるぎの里。

つききたる宿の犬の子おひやりて

ひとりわたりぬ、里の板ばし。

やせはてし脛の血すひて飛びゆきし

蚊のかげさびし、秋のはつ風。

亡き友の柩まもりて、きりぎりす

聞きにし秋はまためぐり來ぬ。

九 晩 秋

一、 秋 郊

柿の落葉を踏みて後山に登る。黄茅蕭蕭として亂れ、龍膽の碧、棗實の紅と徑を綴る。山上より見れば、田は盡く刈られ、麥の緑なほほのかにして、村も瘠せたり。晩秋の野いたく寂びぬ。

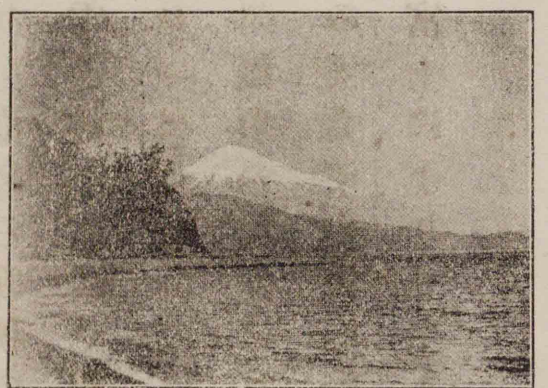
鳥五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴きつれて彼方の村に向ふ。啞啞の聲、満山に響く。

二、月を帶ぶる白菊

墨繪の如き樹影を浴びて、獨り中庭の夜に立てば、
 月を帶ぶる白菊ほのかに香りて、花の月と囁く聲も
 聞えぬべき心地す。俯きてその一枝を折らんとする
 に、しとどの露にぬれたり。折れば月影ほろほろとこ
 ぼれぬ。

朝來の雨止み、風息み、月夜の靜味、いひ盡し難し。何
 に動かされてか、井戸側の無花果の葉のがさりとい
 ひしあとは、一庭寂然として月と影と共に眠りぬ。唯、
 稀に稀に、檐滴の蔭闇き方に私語するのみ。

三、富士雪を帶ぶ



嶽頂の雪

富士雪を帶ぶ、さやかに雪を帶ぶ、秋空何ぞ高き。風、
 威を帶ぶ、相模灘の怒號何ぞ壯なる。この空とこの海
 との間に、玲瓏として立つ富士
 の秀色を見ずや。絶頂より五合
 目のあたりまで、銀よりも白き
 雪は桔梗色の山層を被ひて、上
 は隈なく下はさながら笹縁と
 れる様に山を包む。雪色淨うし
 て點塵なく、日光に輝きて水よ

^眼りも澄める晩秋の空に襯し、^{豆相}の連山を踏み、萬波
^雪の如く立騒ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗皎潔、神威十
 倍するを覺ゆ。
（神威十倍）

^{絶頂}嶽頂の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるの
 みならず、更に裾野の大景に眼睛を點ず。東海の景は
 富士によりて生き、富士は雪によりて生く。
（徳富蘆花―自然と人生）

一〇 冬枯の林

田舎町の端れの方から町へかよふ大通の橋を渡

つて、毎日、私は町の中學校へ通學してゐた。その橋か
 ら四五軒目に書林が一軒あつた。書林とは言つても、
 書籍ばかりではなく、色色な雑誌や文房具や運動道
 具などまでも賣つてゐた。

その店の中の楣には、東京から來た新刊書のびら
 や、その他色色な石版摺の繪などが貼つてあつた。そ
 の少し奥の方には、同じく賣物らしい、四五枚の額縁
 にはめた繪が掛つてゐた。私は毎日ここを通るので、
 其處に掛つて居る繪を見ない日はなかつた。その繪
 の中で、特に私の胸に深く沁込んで、今でも鮮かに思

* Sketch.

ホカ
カスカ

ひ浮べられるのが一枚ある。
それはスケッチ版の縦繪で、冬枯の雜木林を描いたものである。左側の雜木は高く並び立つてゐて、その下に一條の細い徑がついて居る。その徑の先の方に小さく、親子かとも思はれる二つの人影が次第次第に遠ざかつて行くやうに見える。黄昏らしい暗灰色に、仄かな光を見せた空あひ、その二人の行くての涯には、微かに山影が沈むばかりに靡いて居る。風の絶えた夕暮方の林の木下道、その根元などには落葉が積つても居さうである。木の幹はすすくと伸び

て、枝の先といふ先まで細かにとめて見ることが出来る。さういふ木が遠く遠く立續いて居る。極めて靜かな林の中だ。二人の人は稍俯向き加減に、何か互に語り合ひながら歩いて行くらしい。
何故であつたか解らない、或は自分が父を失つたといふ關係からかも知れないが、その繪が、不圖、自分の胸に深く沁込んだ。私は暇さへあれば店頭に佇んで、その繪に眺め入つた。店へ寄らない時でも、通りすがりに目を上げて一目でも見ずには居られなかつた。見ると、その繪の縁の下の方に「冬枯の林」と小さく

彫つてあつた。何といふ畫家の描いたものやら、私は知らない。勿論、如何なる人が如何なる時に描いたのだか、その由來も知らない。只何となく其の繪が懐しく、飽かず眺め入つて居たくて堪らなかつた。

自分は欲しくも思つた。その繪を持つて來て、自分の書齋の壁に掛けて置いて、日夕眺めてゐたならば、どんなに心が清清しくて落著くことであらう。永久に連續する靜寂な平和な氣分が、必ず此の繪によつて得られるに相違ないと思つた。が、どうしたものか、私には其の繪が欲しいと口に出して言ふ勇氣がな

かつた。店頭に佇立して恍惚として其の繪に眺め入つてはゐても、その繪の價格を訊いて見る心持には、どうしてもなれなかつた。徒に繪に見惚れて、何時も残り惜しい思をして其處を立去つた。

かくして半年過ぎ、一年二年經過した。遂に自分は其の田舎町を去つて東京に出た。

繪畫の展覽會のある毎に、私は成るべく見に行つたが、風景畫のある處を巡つて歩くと、始終、目の前に「冬枯の林」が浮んで來た。「冬枯の林」の印象は自分の頭の何處か奥深くに強く彫込んであつて、消さうとし

たところで消す事は出来なかつた。
 東京近郊の秋の末、雑木林の落葉した中を通つて
 行くと、偶、この繪がまた私の胸に浮んで来る。一人で
 とぼとぼと歩いて行く道が、やがてまた二人で並ん
 で行く畫中の徑のやうな氣がして、櫟しめぎや榛しんや栗などの
 枯木の並立つ片側道を、夕暮の静な冷い空氣を吸
 ひながら俯向きがちに通つて行くと、やがてその今
 一人の人、即ち、亡き父に逢へるかも知れぬといふ夢
 見る如き心地に支配されて、何處までも何處までも
 とさまようてゐた事もある。(吉江孤雁―砂丘)

櫟
 しめぎ
 榛
 しん

一一 蘇 武

風颯颯の秋ふけて、
 日をかさねたる旅衣、
 おもき君命いただきて、
 遠く匈奴*の國に入る。
 野邊の草木や鳥のこゑ、
 聞く物の音も見ること、
 いづれか夷のものならぬ。
 思へば遠く來つるかな。

*蒙古地方の遊牧の民。漢の時代に勢盛なりき。

ながれゆく水、音たてて、
 胸にうれへの波高し。
 故郷母あり、雁鳴きて、
 老の寢覺やいかならん。
 よしや幾夜の草枕、
 旅寢の空にむすぶとも、
 國家のために盡すべし。
 君命おもく、身は輕し。
 かうと覺悟は定まりぬ。
 使命つぶさに傳へつつ、

*蘇武が匈奴に使
 せしは、漢の武
 帝の天漢元年(金
 じなり)。

匈奴の王に面接し、
 蘇武は國書を呈しけり。
 もとより非道の王なれば、
 國書の旨意は聽かざれど、
 單身敵地につかひせし、
 蘇武が勇氣を惜しみつつ、
 ある時蘇武を召しよせて、
 「降り仕へよ、しかあらば、
 おもく汝を用ひん」と、
 説きさとせども可かざれば、

國王おほいに怒をなし、
蘇武をとらへて、荒山の
いはやの中に幽閉し、
食を與へて苦しめぬ。
頃しも北風雪を吹き、
寒さ膚をつんざきぬ。
飢うれば枯草を雪に和し、
いのちを繋ぐ料となす。
日數経れども死せざれば、
えびすら怪しみ且つ怖れ、

こたびは蘇武を野に移し、
羊の群をまもらせて、
「雄羊はらむことあらば
放免せん」とあざけりぬ。
覺悟はしても無念さに、
眠られぬ夜も幾度か。
一夜雲なく月すみて、
秋も最中の空の色、
せめては斯くて在ることをと、
雁に託せし筆のあと。

(一) 漢の昭帝始元六年(五〇)

かくて春去り、夏きたり、
また秋の風、冬の霜、
落葉落葉のかさなりて、
十有九年ゆめの間や。
老いて屈せぬ忠節を
天佑けてか、不思議にも、
雁の使のかひありて、
樂しきたよりぞ聞えける。
國と國との和議成りて、
蘇武は赦され歸りしが、

立ちいでし時の黒髪は
いつしか雪とぞなれりける。(坪内逍遙)

一二 武士氣質

(三) 上杉謙信の養子(三三三―三三八)慶長五年石田三成と計り家康を除かんとする。當時會津にありき。
仙臺城主。(三三七―三三六)
磐城國西白河郡、陸羽街道にあたる。
同國刈田郡、亦陸羽街道にあたる。
同國中村、相馬氏の所領。

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻入るべき由の仰承つて、大坂を打立ち、夜を日に繼ぎて馳下る。

白河より白石に至る間は、皆敵の中なれば、道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城相馬に差掛つて國に歸らんとするに、相馬亦累代の敵國なり。恙なく通らん事

徳川家康。

叶ふべからず。然るに政宗は僅に五十騎ばかり引具して、常陸國を経て相馬の境に至り、先づ相馬が許に使者を立て、此の度、徳川殿、上杉を征伐し給ふに因つて、政宗搦手より向ふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひしほどに、東路に隨ひて漸く此の境に到り侍りぬ。餘りに道を早めて打ちし程に、士卒悉く勞れぬ。願はくは城下に旅館點じて給はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。と言はせたり。長門守義胤これを聞いて、あつぱれ、運の盡きぬる奴ばらかな。ただにても伊達は相馬が年來の敵なり、ましてや

相馬義胤。〇三七
一三四 上杉景勝に蕪せり。

身方討たれん一方の大將承るといふ者をいいて、今宵一夜討して、案内知らぬ者共を、此處彼處に追詰め、一人も残さず討取つて、年來の仇に報い、此の度の賞に預らばや。とて、頓て民家をしつらひて迎へ入れ、家子・郎從等召集めて、夜討の様をぞ議したりける。爰に水谷三郎兵衛尉某、遙の末座より進み出で、末座の意見恐れ入つて候へど、既に僉議の座に列なつて候上は、心に存ずる所を申さざらんは其の詮なし。抑、窮鳥懷に入る時は、獵者も之を殺さず。とこそ承れ。政宗ほどの大名が、既に年來の怨を棄て、君を頼みて

*
盤城國中村の北
方にあり。

來りしを、たばかりで闇闇と討たんは、勇者の本意と
する所にあらず、長き弓矢の瑕瑾なり。又わが城を去
つて、彼の國の境、駒^{*}が峯に到らんこと、行程僅に三里。
けふの日未だ未の時に下らず。政宗おのが境に到ら
んとだに思はば、日ゆふべならざる間に到りぬべし。
それに僅の勢を以て此處に止まること、豈に深き謀
計あらざらんや。ただ同じくは我が備を全うして、彼
に代つて夜を守り、先づ此の度は本國に返し給ひ、重
ねて戰に臨まんとし、尋常に軍して、勝負を兩家の天
運に任せらるべうもや候はん」と申しければ、滿座の

輩、皆この議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料・魚鹽・秣・糠
藁に至るまで積置きて、夜に入りては、四面に篝火た
かせ、共に夜を巡らせ、警衛心を盡してけり。

義胤が士共も、政宗が餘りに取鎮めたる體を見て、
「憎し、いざ彼が振舞を試みん」とて、夜更けて馬一二匹
切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騒ぎ罵
る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛け
て、左の手に刀提げて立出で、「相馬殿の御人や候、御人
や候」と言ひし時、「さむらふ」とて参りければ、「物音高う
候、何事にや。政宗が雜人ばら狼藉候はんには、よく鎮

めてたべ」とて、復、内にぞ入りにける。斯くて夜明けけれども立ちもやらす。巳の刻ばかりになつて、義胤が許に使用して一禮し、靜に馬をうつて行く。竊に人を付けて見せたるに、彼の國境の駒が峯のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く充ち満ちて出迎へぬ。

斯くて關が原の合戦終り、天下悉く平ぎて、相馬既に所帶を沒收せられ、家亡ぶべきに極まる。政宗、徳川殿に度々歎き奉りしかば、其の事となく、年月を経て後、本領をぞ賜うたりける。此の時より、かの家、年毎の評定始には、満座の輩一一に水谷が子孫の座の前に

進みより、「水谷殿の御意見違ふ事あるべからず」と色代して罷り出づること、長き佳例となりけり。

（新井白石―藩翰譜）

一三 形

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、五畿内・中國に聞えた大豪の士であつた。

その頃、畿内を分領してゐた筒井・松永・荒木・和田・別所など大名・小名の手の者で、「鎗中村」を知らぬは恐らく一人もなかつたであらう。それほど、新兵衛はその

扱きだす三間柄の大身の鎗の鋒先で、魁殿の功名を重ねてゐた。その上、彼の武者姿は、戰場に於て水際立つた華かさを示してゐた。火のやうな猩猩皮の鎧を着て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵身方の間に、輝くばかりのけぎやかさを持つてゐた。

「ああ、猩猩皮よ、唐冠よ」と、敵の雑兵は新兵衛の鎗先を避けた。身方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵勢を支へて居る猩猩皮の姿は、どれほど身方にとつて頼もしいものであつたか分らない。又、嵐のやうに敵陣に殺到するとき、その先頭に輝いてゐ

る唐冠の兜は、敵にとつて、どれほどの脅威であつたか判らない。

かうして鎗中村の猩猩皮と唐冠の兜とは、戦場の華であり、敵に對する脅威であり、身方にとつては信賴の的であつた。

或日、元服してから、まだ間もないらしい年若な士が、「新兵衛殿、折入つてお願がござる」と新兵衛の前に手を突いた。新兵衛は、「何事ぢや、そなたと我等との間に、左様な辭儀は入らぬぞ。望といふを、早う言うて見」と育むやうな慈顔を以て、相手を見た。

「外の事でもをりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華華しい手柄をして見たい。就ては御身様の猩猩皮と唐冠の兜とを貸してたもらぬか。あの鎧と兜とを着て、敵の眼を駭かして見たらござる。」

「はははつ、念もない事ぢや」と新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受入れることが出来た。

「だが、申して置く。あの鎧や兜は、申さば中村新兵衛の形ぢや。そなたが、あの品品を身に着ける上からは、われら程の肝魂を持たいで叶はぬことぞ」と言ひ

ながら、新兵衛は再び高らかに哄笑した。

その翌日、攝津平野の一角で、松山勢は、大和の筒井順慶の軍勢と鎬を削つた。戦が始まる前、何時ものやうに猩猩皮の武者が唐冠の兜を朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗をしたかと思ふと、駒の頭を立てなほして、一氣に敵陣に乗入つた。吹分けられるやうに敵陣の一角が亂れた處を、猩猩皮の武者は鎗をつけたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突伏せて、悠悠と身方の陣へ引還した。

その日に限り、黒皮緘の鎧を着て南蠻鐵の兜を被

つてゐた中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩猩皮の武者の華華しい武者振を眺めてゐた。そして自分の形だけですら、これ程の力を持つて居るといふことに、可なり大きい誇を感じてゐた。彼は二番鎗は自分が合さうと思つたので、駒を乗出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩猩皮の武者の前には、戦はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかつた。その上に、彼等は猩猩皮の「鎗中村」に突きみだされた恨を、この黒皮緘の武者の上に復讐しようとして、猛り立つた。

新兵衛は平生とは勝手が違つて居ることに気がついた。何時もは虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵にあつた。彼等が狼狽して血迷うてゐるところを突伏せるのに何の雑作もなかつた。今日は、彼等は對等の戦をする時のやうに勇み立つてゐた。どの雑兵も、どの雑兵も、十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突伏せることさへ容易ではなかつた。敵の鎗の鋒先が、ともすれば身をかすつた新兵衛は必死の力を振つた。平素の二倍の力をさへ振つた。併し彼

は、ともすれば打負けさうになつた。氣輕に兜や猩猩皮を貸したことを後悔するやうな感じが、頭の中を掠めた時であつた、敵の突きだした鎗が鎧の裏をかいて、彼の脾腹を貫いてゐた。(菊地寛―極樂)

一四 自恃

英佛の艦隊のナイル近海にて將に會戰せんとせし時の事なり。英の水師提督ネルソンは、諸將を旗艦に集めて豫ての戰略を示しけるに、一大佐は喜びて曰く、「若し此の戰略によりて勝つことを得ば、天下の

(-) Nile.

(二) Heaven helps those who help themselves.

驚歎いかばかりならん」と。提督曰く、「若しとは何ごとぞ。勝利は確實なるを。但し誰が生存して其の情況を報ずるか。は別問題なり」と。ネルソンが自ら恃むことの如何に厚かりしかを見るべし。

成功の要素一二のみならざる中に、自ら恃むの徳は其の最も緊要なるもの。隨一なり。自ら恃むとは、かの「自ら助けよ、天汝を助けん」といふ古語の意を體し、他人の助を俟たずして、専ら自己の力を恃み、進んで事に當るの謂なり。蓋し内より來る助は常に其の人を強くすれども、

* Doctor Johnson.
(1709—1784)

英國の著作家。

外より來る助は必ず常に之を受くる者を弱くす。かの富貴の子に薄志者の多きは、幼きより起居・眠食ともに他人の奉侍を俟つに慣れて、自ら彊むる力を鈍らしめられたればなるべし。此の故に新井白石は河村瑞軒の好意を辭し、ドクトル・ジョンソンは贈物の靴を斥けて穢く古きを穿ちたりき。貧苦・病苦に福音あり。といひ、逆境は最も有爲なる者を卒業せしむる學校なり。といひ、艱難は人を玉にす。といふ。いづれも人は全力を試鍊せらるる機を重ぬるに及びて、初めて其の本色を發揮するをいへるならん。古今東西の一藝

一術に秀でたる人の傳を讀むに、名人・上手の名を少なくとも其の一代に知られたる程の者は、其の修行期の若干頁を血の涙の歴史たらしめざるは無し。されば、かの金絲雀とかいふ鳥に佳き音を出さずる爲には、其の目に焼針を刺込むといふ話あるも、全くの寓話にはあらざるにや。

人に、生れながらの才と不才とあり、又健康と病弱とあるは争ふべからず。これ運命なり。されど其の才をして大なる用をなさしめ、其の健康を保全して長壽ならしむるが如きは人の力なり。力めて已まざる

ば、不才をも有用の材たらしめ、病弱をも活動に堪へしむるまでに鍛ひ成さんこと、望みがたきにあらず。人は宜しく人事を盡して天命を俟つべきなり。運命と境遇とが人を殺活することあるは事實なれども、機會を利用するに敏なる者は、自ら能く境遇を造るなり。(坪内逍遙—中學修身訓)

一五 アルプ山越上

お別れ申したるは、故山の百花はなやかに我が戎衣の袖に薰り、春風軽く征旗を吹送る頃に

西紀前二一八。
カルタゴ。

(三) Alps.

候ひしを、いつしか花去り、青葉も過ぎ、秋月また更けて、アルプ山麓に到り着きたるは、はや満目の霜露、鐵衣にしみわたる頃と相成り候。幸に越えては來つる難關の苦辛、お察し下されたく候。殊にアルプ天嶮の横斷は難中の難、冒險中の冒險にて候ひき。

雲外萬里、見あぐる幾重の峻岳、天を摩してそそり立ちつつ、遠く伊太利の國境數百里を圍み、さながら宇宙はここに劃せられたるかの感これあり候。仙鶴の風に乗るは知らず、天人の雲に

駕するは知らず、梢を傳ふ猿猴の手もなほ攀つべからず、嵐に翔る暴鷲の翼もまた越えゆくべからず。

この擧もとより空前の冒險たり、されど我がハンニバル將軍のこの擧は、止むを得ざるに出でたる懸命の壯圖に候。我に地中海を我が物と横行したる昔日の海上權の強きあらば、我に地中海沿岸を壓したる昔日の海軍力の大きいなるあらば、羅馬城下の盟、いかでこの懸軍萬里の遠征に俟たんや、悲しいかな、エガテズ島邊の海戦

(一) Hannibal. (B. C 247—183)

(二) Roma. (Rome.)

(三) Aegates. (Aegadian.)

シチリヤ島の西。西紀前二四一年この島邊にてカルタゴ艦隊全滅す。

(四) Carthage.

に我が艦隊の殆ど全滅し去つてより、海上權は全く羅馬に掌握せられて、地中海上はこの二十年間、敵軍の縦横に濶歩する所となり果て、今日

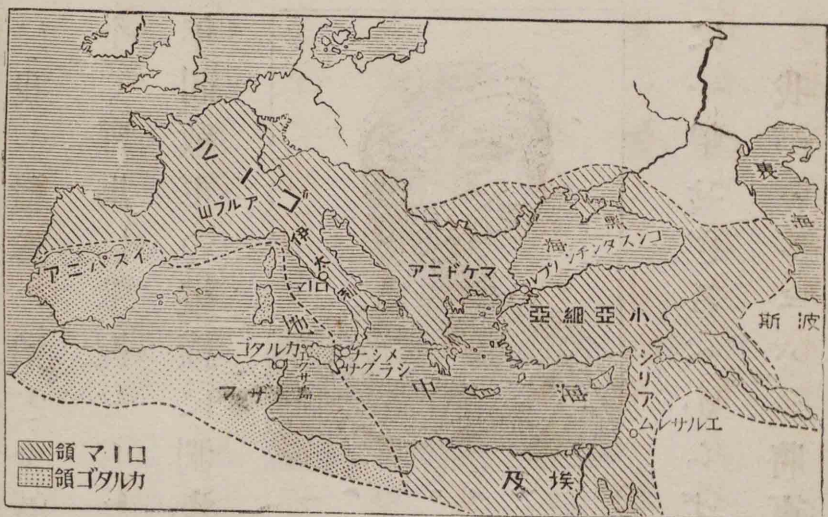


ハンニバル

のカルタゴは頼むべき艦隊を有たず、渡るべき海のあらざるなり。海渡るべからず、艦頼むべからず、しかも羅馬は是非

に一撃せざるべからず。

我がハンニバル將軍が懸命の壯圖によつて、



海なく艦なき我がカ
 タゴは、今こそ對岸の敵
 國に討入るべき道を得
 たるにて候へ。今日の我
 がカルタゴはこの行路
 の外に征騎の進むべき
 道なきなり。我がカルタ
 ゴが一舉して羅馬本國
 と雌雄を決すべき道は、
 全くこの一路の存する

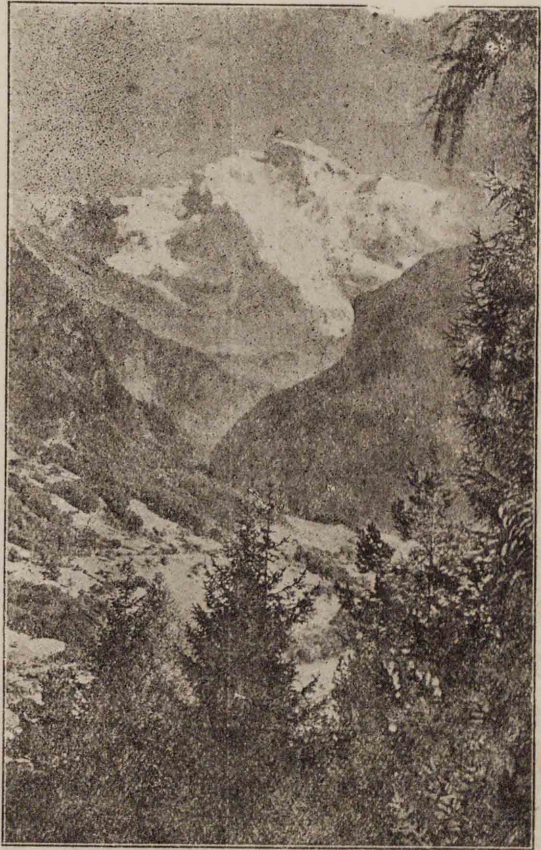
のみにて候。何ぞここに趨起すべき、何ぞここに
 逡巡すべき。莞爾として進軍の命を迎へたるは
 全軍九萬決死の士、吹下すアルプの山風に、征旗
 堂堂と押出したる意氣は、誠に天地を呑みつく
 したる概あり。あはれ、天嶮もし心あらば、拍手し
 てこの珍客を迎へたるならんと存じ候。

一步登れば一步更に危く、一崖攀づれば一崖
 更に嶮しく、山は層一層前途を塞ぎて、我が軍を
 拒まんとするに似たり。されども人人はいつか
 な動かぬ鐵石心、かたみに勵み勵まされつ、何處

までもと進み行けば、數萬の蠻民は左右の高峯に群りて、我が領土に奇怪なる推參者、一步もゆるさじと猛り立ちて、亂下する矢石は吹雪まじりの雨霰、面を向くべきやうもあらず。さすがに一時は辟易して、ここに露營を張らんとせしが、妙案奇謀に富める將軍は忽ち一計を案ぜられ、夜に乗じて、露營を撤して進軍せられぬ。そは、蠻民どものをかしさは、晝間のみ活動し、夜は各自の小屋に歸りて、高峯の防禦の空しきを探り得たるが爲に候。

かくて全軍は暗澹たるアルプ山谷の深夜、皚皚たる氷雪の光に、道なき道を急ぎて、志したる高峯へと向ひたるが、いかにせん、蜿蜒たる數萬の大軍なれば、全軍未だ登りつくすこと能はざに、天は早くも明けそめて候。蠻民は小屋の眠さめぬ。彼等の活動すべき時となりぬ。夜は萬物靜止の時と心得たる彼等の曉起の眼前に、いつしか我が大軍の高峯を越えゆくを見たる、その驚やいかばかりぞ。その驚はやがて怒となりて現れ候。彼等は山上の大石を搖がして轉轉落下せ

しめつ、轟轟たる響は天柱を折りつくし、地維を



山 々 々 々

碎き 盡さ んと 見え て、凄 じさ 言ふ

ばかりもあらず。口惜しいかな、崖下の我が軍は
見る見る幾丈の岩石に打倒され、千仞の溪谷に

跳飛され、白雪皚皚たりし山谷は忽にして唐紅
の血潮の色と變じ、風は血を含みて腥きの中に、
轟轟たる落石の響に混る人人のをめき叫ぶ聲、
慘たる當時の光景、暫しはこの世の天とも覺え
ざりし一行の心情、とても申し盡す筆も詞もこ
れなく候。

我も人も征路の露とは固より覺悟したる命
にはあれども、名もなき蠻民のかかる虎狼の毒
牙にかかりて斃れたる、幾萬の同胞が無念の精
靈は、さこそ妄執の鬼と迷ふらめ。いでや同士が

弔ひ戰、蠻人どもを塵にもと、一度は思ひはやり
 もしつれど、當の敵は羅馬にあり、志すは敵の不
 意に在り、一刻も猶豫すべきにあらずと思ひか
 へし、戀しき同士の墳墓とされる山谷に、暫し目
 禮の別を告げつつ、その山を辭すれば、前山は我
 等を迎へて更に高く、溪路は我等を待ちて更に
 峻しく、蠻人は我等を遮りて更に頑強。かかる峻
 難の間に苦闘奮進すること八日間、辛うじて、全
 軍アルプ絶頂の天風に、覺えず快哉の聲をあげ
 たりしは、實に九日目にて候ひき。天外萬里の空、

遠く茫茫たる伊太利の平原を瞰下したりし時
 の愉快さ、お察し下されたく候。覺えず戈を振ひ
 て躍り下らんかと狂はれたりし程に候。然るに
 今一六下アルプ山越下、我等を待ちて候。全軍の士氣はここに新に、全軍の意氣は既に
 伊太利の平原を呑み、全軍の心は既に羅馬の都
 門に城下の盟を待つばかりに候。されどアルプ
 天嶮の飽くまでも羅馬最頂に作られたる憎さ
 は、伊太利に面したる方は亂山一層峻嶮を競ひ、

加ふるに冰雪を以て覆はれたれば、これを下らん危さは、これまでに勝る冒険にて候ひき。猛虎の如き巖は風雪に逆つて咆哮し、削るが如き山骨はここに數丈、かしこに幾丈、しかも冰雪に研ぎすまされたるをや。一步を誤れば萬事休す。眼下の谷は千仞の口を開きて我を呑まんと待受けたり。過つてこの非運に陥りたるものも少なからず。戈を杖に、踏みしむる足もと半ば滑りつつ此處を下れば、積雪は又前途を埋めて山谷を辨ぜず。一步誤れば身は萬丈雪底の屍。此處にて

も一行の葬られたるもの少なからず候。嶮又嶮、慘又慘、命は天に託してひたすらに進みゆきたるに、見上ぐれば中天に入る絶壁、見下せば地底に沈む断崖、路は此處に絶えて、行くべき方も無くなり候。ここになほ勇を鼓して、この窮路に先導を試みんとしたる一隊の兵は、空しく悲壯なる最期を遂げて復歸らず。人既にかかり、まして幾多の馬隊をや、象隊をや、到底これを遣るの道なき事とはなれり。さてもやは争で止むべき。決死の全軍はここに岩を毀ち山を裂きて、行路

を開通する事と相成り候。天嶮改造の工事、後人若し聞かば壯快の感多からん。されど當時の我が軍は、ただただ苦痛に悩む外はあらざりき。難境かくの如くなれば、ここに露營すること三日間、寒風は肉を劈き、氷雪は骨を刺すが中に、一片の火の温むるなく、寸分の蔭の掩ふものなくして、吹きさらされし程の苦痛は、なかなかに來し方に勝る辛さにて候ひき。かくて虎口は逃れ出でしかど、嶮難はなほ此處に盡きずして、到る處に我が軍を苦しめ、辛うじて麓近き^{*}アオスタの

*Aosta

里に着きたるは、それより三日目の事に候ひき。冒險中の大冒險、アルプの横斷のつひにここに遂げられたる嬉しさ、一時は夢かと怪しむばかり、御察し下されたく候。日を費したること十五日、九萬の大軍中、残れるは僅に二萬の歩兵と六千の騎兵とに過ぎず。この二事以てその慘澹たりし壯舉の情況を示し盡したりと存じ候。生き残りたる者は肉落ち、骨瘦せて、ただ見る餓鬼の群に異ならず。餓鬼よ、餓鬼よ、羅馬の血に飢ゑたるカルタゴの餓鬼にこそ。と、互に笑ひ興じた

る次第に候。

このカルタゴの餓鬼は突如として、アルプ天
嶮を破りて、伊太利の平原に荒れいでたるなり。
敵の驚は察せらるるばかりにて、チチノ河邊ト
レビア河頭の戦捷より、更に進みてトラシメノ
湖畔の大勝、我がハンニバル將軍の壯圖は着着
その成功を示し得て、天運未だカルタゴを離れ
ざるかと思へば、そぞろ嬉し涙の止めかねて候
を硯に受けて、あらあら申し述べ候。(鹽井雨江)

(一) Ticino.
(二) Trebia.
(三) Trasimeno.

一七 辛抱くらべ

人は我慢が肝腎である。ナポレオンも言つた、何で
も戦鬪は五分間の辛抱で勝てる。と。戦鬪ばかりでは
ない、百事皆その通りで、こちらが苦しいと思へば、あ
ちらも苦しいのだ。我慢較べ、辛抱較べて勝負は分れ
るものである。

ここに北米合衆國の大偉人グラントと云へば、鬼
將軍と唱へて、南北戦争四年の間に、一度も負けたこ
とのないと云ふ豪の者。この點より云へば、ナポレオ
ンより偉い將軍だ。しかしその自叙傳を繙いて見れ

(四) Grant.
(1822—1885)

ば、彼もやつぱり人間で、決して鬼ではなかつた。

グラントが初めて戦場に出た時、一大隊を率ゐて居たが、こはくてこはくて堪らない。併し誰も皆初陣



のこととして、顫へて居るのもあり、顔色の青くなつて居るのもあるから、指揮官が顫へてはならないと、大いに我慢をして力

んで行くと、先方からも一隊の敵兵が進んで来た。これを見ると、その軍容の勇しき、旌旗は空に翻り、銃劍は太陽に閃き、正堂堂と押寄せ来る勢に、一目慄然

とする程に恐怖心が起つた。けれども男子一旦死を決して出掛けた以上は、固より退く譯には行かぬと度胸を定めて、此方もどしどしと向つて行くと、最早互に程近くなつたが、雙方とも未だ發砲はしない。一體、臆病な者は、見當も定めず、むやみに遠方から鐵砲を撃つものださうだが、兵法に従へば、なるべく接近してから一齊に砲と撃つのが本當であるさうだ。グラントは兵學校卒業の人であるから、出來得るだけ接近してと考へて、やはり敵を見ざる時の如く、依然として歩を進め、恰も恐怖などいふ事は更に知らざ

るが如く、カミかへつて向つた。すると兵卒どもは驚いて、何と、わが大將グラントと云ふ人は「渾身皆膽」とでも云ふべき人であらうか。われわれは顛が震へ、手が震へて、物も言へぬほど怖しくなつて來たが、グラントは一向平氣な顔で進まれる。世に鬼將軍とは實にわが大將グラントの事であらう」と感服して跟いて行く。グラントの心になつて見ると、なかなか鬼將軍どころでない。實は怖氣將軍で、怖くて怖くて堪らないのである。まだ接近もしないうちから、幾度か發砲しようと思へたり、又は愈堪らなくなつて、逃げよ

うと思つたりして、遂には、殆ど目も見えず、耳も聞えぬ位に逆せ上つて、皆無、分別がなくなつて了つて居たといふ事である。

然るにここに一段面白いのは敵軍の方である。これは南北戦争が終つてからの話であるが、一日、偶然或處で、グラントがこの初陣に向つた時の敵の大將何某に出會つた。處がその將軍の話に、「グラント將軍、實に君の大膽には恐れ入りました。かの何年何月、何處の戦に、予は初陣の事として、おぢおぢ君に向つた所が、一向君は發砲もしない、又更に退きもしない。そこ

でいよいよ怖氣がついて、よほど我慢はしましたが、とうとう浮足となつて、君にさんざん破られました。まことに君の膽力には恐れ入る。その勇武には辟易しました」と諧謔交りに語り出すと、グラントは大口を開いて、「これは實に面白い。拙者も實はかくかく」と、悉く前條の次第を物語り、君が逃げはじめたのを見て、やうやう勇氣を回復した位で、拙者の怖氣は腹より胸に至り、殆ど喉にまで上り、已に息も出來かねようとする有様であつた」と、腹藏なく己が當時の臆病を白狀して笑ひ興じたといふことである。

勿論、幾度も戰場を経て、千軍萬馬の間を往來してからは、こんな事もあるまいが、初陣の時には如何にもそんなものであらう。さうして見れば、畢竟、少少の辛抱の較べ合ひで、つい勝敗が分れるものだと言ふことは、眞理に相違ない。どうせ死ぬか生きるかの場合であるから、仕方がないと度胸を定めて、何でも思ひ切つて覺悟をするのが肝要である。これは決して干戈の戦争ばかりではない、世上は百事戦争である。びくびくして居ると却て丸に中つて斃れて了ふ。劍術の極意にもある通り、身を棄ててこそ浮ぶ瀬もある。

*山川の末に流るる椽殻も、身を棄ててこそ浮ぶ瀬もある。(空也上人繪詞傳)

れで、鬼將軍たるグラントでさへも、最初はなほあの通りであつたと考へて、人生勝利の祕訣を此處より學ばなければならぬ。(松村介石)

一八 南洲遺訓

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は事宜次第、工夫の出来る様に思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には

迂遠なるやうなれども、さきに行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐りて驕慢の生ずるも、皆自ら愛するが爲なれば、決して己を愛すまじきものなり。

過を改むるに、自ら過てりと思ひつかばそれにてよし。その事をば棄てて顧みず、直に一步踏みだすべ

し過をくやくしく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割りし時、その缺を集めて合せ見ると同じことに

蓋學校者所以育善士也不只一郷一國之善士必欲為天下之善士矣夫戊辰之役正踏義血奮闘而斃者乃天下之善士也故慕其義感其忠祭之於茲以鼓舞於一郷之子弟亦所以盡學校之職也
西郷隆盛謹誌

蓋學校者所以育善士也不只一郷一國之善士必欲為天下之善士矣夫戊辰之役正踏義血奮闘而斃者乃天下之善士也故慕其義感其忠祭之於茲以鼓舞於一郷之子弟亦所以盡學校之職也
西郷隆盛謹誌

蹟筆盛隆郷西

て、詮なき事なり。

命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は始

末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業を成し遂ぐることは望み得ざるなり。

道を行ふ者は天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世までも信仰・悦服せらるるものは、只これ一個の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童・婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀で

*曾我十郎祐成・五郎時致、父の仇工藤祐経を富士の裾野に殺す。時に建久四年（一一三三）なり。

て誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるるは僥倖の譽なり。誠篤ければたとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。(西郷南洲)

一九 山口峠の危難上

奈何なる早急な場合に際しても、常に用心は周到でなければならぬ。「油斷大敵」といふ俚諺の通りで、その油斷から、俺はあやふく兇漢の刃の下に一命を奪はれようとしたことがある。

これは俺が大阪に居つた時の話で、佐賀の亂へ遣

鳥尾小彌太。

東區、天神橋の南詰。旅館の名。

るべき兵が不足した時、俺が鳥尾の命を受けて、和歌山へ舊兵隊を連れに出かけた時の途中の出來事である。大阪鎮臺から金銀貨取雜せて五百圓だけ受取り、跡は出先へ送つてもらふ事にして、其の五百圓を無雜作にハンケチに包み、洋服の下つ腹へおし込んで八軒屋の播權樓へ戻つて來たが、店先で俵を降りる途端に、彼のハンケチ包を取落したので、金貨・銀貨が土間一面に散らばつた。出迎へた番頭や女中が拾ひ集めてくれたのを、其のまま包んで懷へぬぢ込み、俺は鞆一つに短銃一挺を携へたのみで、早速旅装を

整へて三人曳の俵を命じた。

春とは云へど、日影は未だ軒に寒い。勢よく俵を飛
せて、大阪の街を出離れたのは午後四時頃であつた。
往く程に、堺四つ池を後に郊外を縫うて、凸凹道を俵
に揺られながら信達しんたつの手前へ差蒐さしつた頃には日も
暮れて、靜な春の夜の人家は寂寥として、前にも後にも
淋しく俵の響を聞くばかりであつた。

これから山口峠を越さねばならぬ。この峠は和泉
と紀伊との國境にあるので、俵は役に立たぬから、俺
は先曳の車夫に、「貴様は一足先に行つて、四人舁の駕

籠の用意をしろ。」と言ふと、「はい、承知しました。」と肩綱
を外すや、一目散に驅けて行つた。程なく信達の驛へ
着くと、既に駕籠の準備が出来てゐて、四人の駕籠舁
が支度をして待受けて居た。

其處で俵を乗捨てて、春の夜寒を厭ふために、軍服
を脱いで鞆に入れ、襦袍と着かへ、防寒具に襟を埋め、
軍刀は何の氣もつかず駕籠の竹柱へ縛りつけて、打
寬いで出立した。一步は一步爪先登りに、幾度か暗い
樹立を潛り抜けると、駕籠は何時か山路にかかつて
居る。ぎしぎしと息杖のきしむ音、さらさらと梢を掠

める春の夜風。

「ああ、月が出るな」と思ひながら、粗末な駕籠に脊を凭せてゐる中、ついうとうとと睡氣がさして來た。何しろ大阪表の連日連夜の談議で酷く疲れて居たので、知らず識らず瞼が重くなつて來る。すると、先刻から大聲で話し合つて居た駕籠舁仲間が、何やら怪しげな符牒で合圖をして居るのに氣がついた。はつと思ふと、渠等の「大丈夫だ、あれを持つて來たから」といふ二言三言が小耳を掠めて聞えた。さては近頃四つ池邊へ出て殺人強盜をやる奴等の仲間だな」と感

附くと、睡氣も俄に覺めて、心頭焦眉の急に處すべき手段に思ひ及んだ。

憎むべき駕籠舁どもは、途途も全然俺が寢込んで居るものと安心して、尙、小聲で話しながら、駕籠は山路をとつとつと登つて行く。どうしたものかと思ひながら、密と薄目を開いて左右を見遣ると、左手は切つそいだやうな山腹、右手は物凄い谷間の底に侘しい瀬音が聞えるではないか。此處でうっかり手出しをして、若し駕籠のまま谷底へ放り込まれたら骨灰微塵、それこそ百年目だ。よしつ、峠まで我慢しろと觀

念して、舊の儘に駕籠の中で狸寝入をして居たが、斯ういふ破目に陥つたのも、全く俺の不用心から起つた事で、仕方がない。鎮臺で受取つた金包の取扱を粗末にして、播權樓で落したのを悪車夫が見て居つたので、一味悪黨の駕籠舁奴らに耳打ちして、この峠で俺を殺さうと企てたのである。何しろ敵は四人、身方は一人、假令遣付けるにしても、手傷位は負ふ覺悟でなければならぬ。

更に一層の不覺と云はねばならぬのは、苟も陸軍武官の職にありながら、軍服を脱ぎ、軍刀を駕籠の柱

*
前漢の智謀家。

に縛りつけて了つた事で、今急にその武器を取る事が出来ない。昔、漢の陳平^{*}が船中で賊に襲はれた時、身ぐるみ脱いで飛出したといふ話があるが、この駕籠舁共も金が欲しさに俺を殺すのだ。金さへ出せばそれでよいのだから、一層懷中から五百圓を放り出して遣らうか。と思つたが、併し兇漢が果してそれで承知するかどうか。毛を吹いて疵を求めるのは馬鹿馬鹿しいし、第一武官の職に對しても相濟まんと、暫く俺の最初の不用心を後悔して居た。

併し何時までも斯うしては居られない。袋の鼠と

思つて居る彼等の手中に、貴重な一命をくれてやる譯には往かぬ。何とか處置を採らなければならぬ。この時、俺は、不圖、その昔鎌倉の尼の詠んだといふ歌を思ひ出した。

千代のめが戴く桶の底抜けて、

水たまらねば月も宿らず。

その歌の心に思ひ及ぶと、俺は心機一轉した。

「よしつ。無から無のつけあたりで、電光影裏に春風を斬る、遣付ける。」と決心して、襦袍の内懷を探つて、泰然として渠等が急ぐに任せて居た。

二〇 山口峠の危難 下

夜は靜に更けて、峠の空に春の夜の月が浮んだ。樹立の茂みで懸崖の肌は黒く、うつすりと照る月の光も其の夜は趣あるものとは思はれなかつた。先刻の「あれを持つて來た。」と云ふ言葉の意味は、峠の上で俺を殺す兇器を持つて來たとの事に相違ない。併し俺はこの通り體も巨きいし、武人である所から、彼等にも油斷はない。十分首尾よく遣る積りで、腕節の強い兇漢が揃つて遣つて來たらしい。汝奴、いまに見ろと

寝て居るはずの俺は、拳銃をしつかり握つたまま、態と臉を閉ぢて居た。

愈坂路を登り詰めて山口峠の絶頂へ來た。斜に伸びた山路の傍、僅の平地に一軒の茶店があつた。茶を汲む人は麓へ降つて、破れた簀の子を淋しく風が掠めて吹く。渠等が一方の崖際に靜に駕籠を昇きすゑた瞬間、こらつと怒聲一番、横飛びに駕籠の中から躍り出した間一髪、駕籠舁は拔身を逆手にぐさと駕籠の上から突込んだ。一人の奴は狼狽て、駕籠の柱へ斬付けた。

この時迅く、俺は仁王立ちに突立つて、一發どんと打放した。兇漢どもが逡巡ぐ暇に、俺は後の高地へ驅上りざま、拳銃をさし向けて、「さあ來い、幾人でも遣つて來い。不埒な奴だ」と怒鳴りつけた。實際その頃は血氣盛り、短銃は撃馴れてゐるから、三人や五人を向ふへ廻しても遣付ける積りであつた。併しさうなると弱いもので、唐突に短銃を向けられて酷く面食つたものか、四人の奴等は二人づつ右と左へ飛ぶが如くに麓を指して逃失せた。拔刀を提げて居たのは確か二人であつたと覺えて居る。兇漢どもの良は斯うし

て免れたが、若し彼の時今少し寝込んで居たら、俺はあの峠の頂で串刺に遣られたに違ない。

それは好いが、困った事には駕籠舁を追ひちらしたので、寂しい峠には、空駕籠と俺一人が取残されて了つた。山口驛まで降るには、彼等の逃げて行つた山腹の嶮路を辿らねばならぬ。若し途中で彼等から悪戯されては困ると思つたが、何時までもぐづくづ斯うして居る譯には行かぬから、俺は襦袢の上に、軍刀や鞆を十文字に紐をかけて脊負ひ、頭から毛布を冠り、右手に拳銃を握つて、辨慶が七つ道具を脊負つた

やうな妙な態で、のこのこと山路を降りはじめた。

麓近く來かかつた時、こんな事を思ひ出した。山姥の謡曲に、「佛もあれば衆生もある、衆生もあれば山姥もある」といふのと同じ道理で、丁度世の中には善人もあれば悪人もある、悪魔も天帝も見てゐるのであるから、如何なる危急な場合にも、油断さへなければ危難を免れる事は出来るものであると、つくづく考へた。

山口峠に於て、全く不用心から危く雲助に殺されようとした俺は、何の爲に和歌山へ夜をかけて往つ

たのか、矢張り人を殺す爲の兵隊を募りに行つたのである。人界の事といへば眞に妙なものである。こんな事が禪の所謂「柳は緑、花は紅」とても云ふのであらう。

それから夜の白白明けに山口の驛へ着いて、和歌山へ急ぎ、豫定の任務を遂行したのであつた。

(岡本柳之助―風雲回顧録)

二一 運命上

世の中の出来事の、來りて吾等の運命を左右する

* David.

もの、その數、日に百千のみならず。然れども吾等がこれを認め得るは、唯その表面に顯れ、實際に結果を生ずる一半のみ。その來らんとして來らず、殆ど己の上（カクシタセ）に附着せんとして遂に附着せず、そのままに消えゆく出来事は又實に夥し。若し吾等が己の運命を左右する出来事を認むるのみならず、更に又將に吾等の運命を左右せんとしては空しく消えてゆく、暗暗裏（カクシタセ）の出来事を認め得んには、吾等の生涯の望と畏とは誠に無限無邊ならん。ダビッド（David）の事、以て見るべし。吾等はダビッドの既往を知らず、又、知るを須（タラシ）ひず。

* Boston.

吾等は、今ただ、二十歳の少年始めて故郷の田舎を離れ、ボストン府なる叔父の舗に行きて手代とやらんとする途上に在る渠を見るのみ。その履歴は小學校及び中學校にて、一通りの教育を受けたりといふのみにて事足るべし。田舎少年の心安さは、車も藉らず、日出より歩き出して既に日中に至れり。時はこれ夏のなかば、漸く覺ゆる疲勞と、益加はる暑熱とに惱まされて、渠はかたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の過ぐるを待ちて、これに投ぜん、と決意せり。

鬱蒼たる幾株の喬木丘の上に直立し、ほとりには

亦清らかなる泉の水の湧出づるあり。たとひダビッドならずとも、往來の人、誰かこの日にこの樹蔭に逢うて、一たび憩ふことを思はざらん。ダビッドはまづ泉の水に渴きたる喉を潤し、徐に負ひたる包を解き、おろして、その上に粗末なる木綿の手拭を重ね掛け、これを枕として仰ぎ臥したり。

太陽の光はうち重なれる枝に遮られて、ダビッドの身に到らず。往來の路は昨日の大雨に濕ひたれば、いまだ塵を飛すに至らず。おひ茂れる緑の草は絶好の褥よりも快く柔かなり。泉の水は沸沸として常に

耳邊に鳴り、縦横せる枝はそよ吹く風の爲に、よりより微搖するのみ。ダビッドは忽ち心陶然として恍惚たるうちに、身は既にうまいの裏に入りぬ。

ダビッドは樹蔭に眠りたれど、途上には覺めたる人なほ少なからず。或は馬に跨がり、或は車に駕し、又或は歩みて、以てダビッドの眠りたる前を來往する者點點たり。或は傍目もふらず過行けば、渠のここに在る事を知らざるもあり。或は偶、渠がここに横はれるに寓目すれども、おのが心の忙しきに蔽はれて、別に意を留めず過行くもあり。或は渠の無邪氣に眠れ

寓目
目
セ

るを見て笑ひつつ去るもあり。或はその路傍に眠れるを卑しみて眉しかめつつ行くもあり。禁酒會員は偶、これを見て、醉漢が路傍に死人の如くに倒れたる一例を得たりと、自ら頷くもありて、非難稱羨、一讚一譏、すべてダビッドの上に聚まれり。而してダビッドはすべて感ずるなし。

幾ばくもなく、一輛のはてやかなる輕車あり、毛色麗しく揃ひたる二頭の馬を駕して、犇犇と馳來れるが、この木立の前に至つて突如として止まりたり。蓋し一本の轄くさび緩みて、一個の輪にくるひを生じたれば

なり。車内に居たるは齡高く品よき商人夫妻なりき。夫妻は從者が輪を整ふる間、樹蔭に憩はんとて立寄りたるが、その下にダビッドの横はれるを見るより、俄に驚きて二三步しりへにさがり、ためつ眇めつ凝視して、纔に心を安んじたれば、このうまいせる少年を驚かさざるやう、忍び足して再び樹蔭に立寄りながら、夫は妻に低語せり、「あの快げに眠れるさまを見よ。あの呼吸する氣息の極めて容與たるを見よ。これ健康にして心安らかなる者にあらざれば能はざるなり。もし余をしてかかるうまいを得しめば、余はわ

が歳入の半ばを割くとも惜しからざるべし」と。妻も今、風に一方の枝押しやられ、一條の日光洩れて、少年の面を射るを見て、自ら手を伸べ、糾れたる枝を解き、これを蔽ひやりながら、亦、夫に低語せり、「天はこの好少年をわれらに與へ給ふと見ゆるなり。われらが從弟の子の所行に失望せる後、偶然この樹蔭に立寄りて、この少年に邂逅するは、誠に不思議のことならずや。且つ熟視すれば、何となく面ざし逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に渠を呼醒さんか」といふに、夫は打案じて、「そは何の爲ぞ。吾等は未だ少年の素性を

* Henry.

も知らずして」といへば、妻も稍惑アヤひながら、なほ思ひ入りて、「さりながらその無邪氣なる容貌、その無心に眠れる姿を見給はずや」といふ。
(かよかろし)
(何んぞ)

二二 運命下

今や一個の莫大なる福はダビッドの上に臨めり。この老夫妻は唯一人の子ヘンリーを先立たせ、家に蓄へたる巨萬の富を續がしむべき者もなく、せめては遠き従弟の子にてもと目ざして、これを尋ねしに、その子は所行不良にして心に適カチはず、今失望してボ

ストンに歸らんとするなり。人はかかる時に當りては種種の想像をも畫くものなり。妻は再び繰返せり、「試に呼醒さんか」と。

同時に背後に従者の聲あり、「修覆整ひて候」と。老夫妻はこの聲に、忽コトニ焉(カク)としてわれに復り、相携へて再び車に乗りぬ。ダビッドはなほ駒駒然たり。

老夫妻を乗せたる輕車は去つて未だ一里は行かざるべしと思ふ時、又兩個の人ありてこの樹蔭に立寄りたり、いづれも木綿の頭巾を目深に被りたれば、審アキラカに視るべからざれども、顔の色いたく黒くして衣

粗野
イヤシク
下は四
サウブリ
冷血
お

服粗野に、且つ此處彼處に幾多の汚點さへ印したり。この兩人はこの邊を徘徊する山賊にして、今やその賊物を分たんとて、この樹蔭に来れるなり。かくてダビッドの横はれるを見るより、一人は早くも一人を顧みて囁けり、「叱、汝はあの枕にせる包を見ずや。」一人「然れども若し目を覺さん時は。」一人は急に懷中を探りて七首の柄を微しく露し示して、「これのみ」と。兩人は早くもダビッドの傍に進みより、一人はその七首を抜きて胸に擬し、一人は頭の方にまはりて、その枕とせる包を竊に抽かんとす。

* Brandy.

この時兩人の顔もしダビッドをして眼を開き視しめば、直に以て悪魔とや爲さん。この時、忽ち一頭の黄犬あり、鼻をふりて頬に地上を嗅ぎつつ此處に走り來れり。一人は目ざとくこれを見て、「咄、休めよ休めよ、狗兒の主人を尋ねてここに到れるならん」と。一人は七首を懷中に收めたり。一人は懷中よりブランデー一壺を取出せり。仕事の將に成らんとして敗れたるを笑ひ罵り、かたみに幾口かを飲むうちに、各、黎面に一種の紅を生じ來れり。後にはダビッドのことを忘れて、がやがやと打興じつつ、相携へて又立

去れり。しかもダビッドはなほ駒駒然たり。

一時間の睡はダビッドの疲勞を醫し了へたり。ダビッドは少しく身動きせり、徐にその唇を搖がせり。聲は無けれど、口の中に獨り半殘の夢を語れり。遙に響く輪聲、既にして殷殷、既にして轟轟、益近くして益高く、今や轆轤として尺寸セオンスの間センソに來れり。これ一輛の乗合馬車なり。ダビッドは俄に躍り起てり。

「御者よ、茲に旅客あり。」

「上層に席あり。」

ダビッドは馬車の上層に登りて坐せり。ダビッド

御者
馬ウマ使ツカ
レキロク
リヤクセク

は前途幾多の望を懸けたる樂しきボストン府に馳行けり、かの清泉には一顧コク眄メンの別ワカをだにせずして。

一たびは富の神のここ一度に來りて、黄金の光その水面に照射せることのありしを、ダビッドは知らざるなり。又一たびは死の神のここ一度に來りて、その水上に血を染めんとせることありしをも、ダビッドは知らざるなり。ああ、かれは生涯竟にこれを知らざりしなり。
(森田思軒譯)

二三 乃木將軍

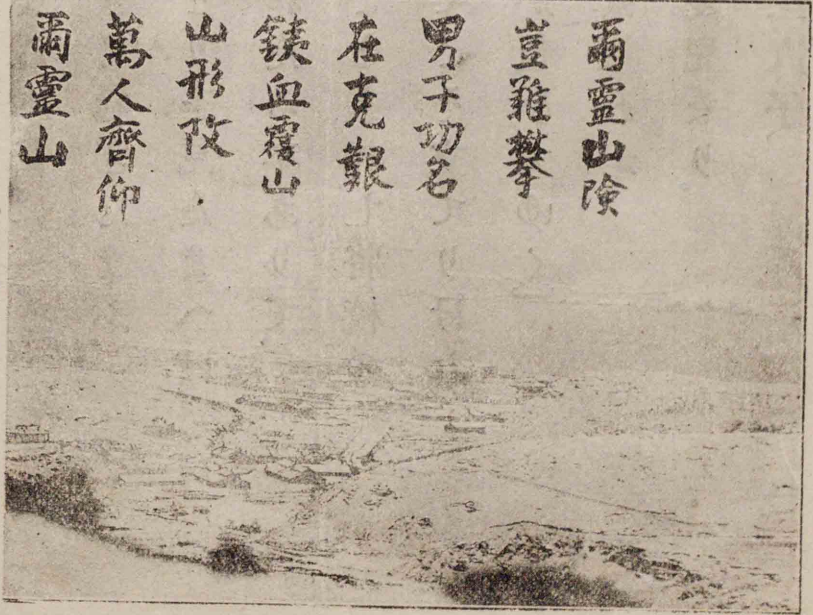
* Beton.

つはものの武勇なきにはあらねども、
 眞鐵なすべ^{*}トンに投ぐる人の肉。
 往く者は生きて還らぬ強襲の
 鋒をしばし轉じて、右手のかた、
 圖上なる標の高さ二零三、
 嶺の二つ聳ゆる石山に
 たえだえの望の絲を懸けてこそ、
 きのふけふ、軍の主力を向けてしか。

霜月の三十日の夕まぐれ、
 將軍は高崎山の師團より

ただ一騎、柳樹房なる本營に
 歸らんと曲家屯をぞ過ぎたまふ。
 ほの暗き道のほとりを見たまへば、
 身中みな血に塗れたる卒ありて、
 そびらには、はやこときれし將校の
 亡骸を搔きのせてこそ立てりけれ。
 「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひてゆく。」
 「聞召せ。背負ひまつるは奴わが
 主と頼む乃木將軍の愛兒なり。
 年老いし將軍の家の二人子、

そのひとり勝典ぬし
 は、いちはやく
 南山にうたれ給ひて
 残れるは
 弟の保典のぬし一人
 のみ。
 背負へるはその一人
 子の亡骸ぞ。
 父君は心雄雄し
 く、我が主をも



兩靈山陰
 豈難攀
 男子功名
 在克艱
 鏃血覆山
 山形改
 萬人齊仰
 兩靈山

隊附のままにあ
 らせて、『討死の
 身の果は、おのれ
 と三人、葬をば
 ひと時に營め』と
 宣り給ひしを、
 人人の強ひて計
 らひつるにより、
 さいつ頃、友安旅
 團の副官に



己酉新年葬五日
 為上泉大佐
 深田製
 帝典製

職かはり、まだ程經ぬにこの朝開あさけ、
あへなくも空しき骸となりましぬ。
果てましし處は高地二零三。
目鏡もて敵の備を望みます、
うら若き額の只中打ちぬかれ、
ひと言をのたまはんひまもなく、
持口の南の峯に失せたまふ。
その骸を奴背負ひて、この村に
ありと聞く野戰病院たづぬれど、
くるほしき心からにや、たづねえず。

かくいふを、駒をとどめて聞きましたし
將軍は、病院の旗ある方を、
鞭あげて「彼方にこそ」とさし給ふ。
面ざしはたそがれ時に見えぬども、
目ざとくも雲の絶間ゆ覗ひし、
寒空にまだ輝かぬ冬の星、
更闌けて、友なる星に「將軍の
睫毛だに動かざりき」と語りけり。

(森鷗外「うた日記」)

二四 意志の力

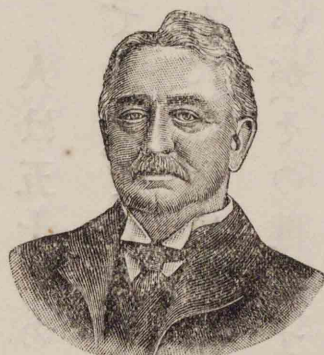
「意志の剛強なる人と急流とは自ら其の道を開く」とは西洋の諺である。意志ある所、そこに光明がある、活力がある。男子一たび志を立てた以上、その成就を見るまでは、如何なる艱難が襲ひ來るとも、牢乎として揺がぬ磐石の如く、如何なる苦痛が迫るとも、卓然と聳ゆる大木のやうな堅忍不拔の心、これが意志の力である。人生の行路には様様の誘惑がある、幾多の障碍がある。その誘惑に打克つ克己心、その障碍を打破つて進む勇猛心、皆これ意志の力である。世に成功

者と稱せられ、或は偉人と稱せられる人達が、世路の難嶮を突破し來つた跡をうかがへば、總て彼等の意志の力の如何に強きかを示さぬものはない。

人は五十年の壽命を以て千年の計を憂ふるものである。その五十年の壽命をも完うし、事業を成就せんには、健康が第一の要素である事はいふまでもないが、その健康すらも、大部分、意志の力で左右せられるものである、といふ事を忘れてはならぬ。

今から十數年以前に死んだ英國南阿の首相セシル・ローズ氏は、十八歳の時、大學在學中に肺病に罹つ

* Cecil Rhodes.
(1853—1902)



グーロールシセ

た。醫師は不治の難症だと宣告し、彼自身も、一時は殆ど人生に絶望したが、強い強い彼の意志は、この間にも無限の活力を湧起せしめた。彼は學校を退き、奮然起つて南阿弗利加の蕃地に赴き、其處に病を養ひながら、吾が生命を託すべき何事かの事業を發見せんとしたのである。

窮屈な學窓から脱け出でて、廣漠たる南阿の天地に身を投出したる彼は、まるで生れ變つた心持になつた。彼は放たれたる鳥の如く、荒野の大氣を呼吸し、

* Kimberley.

椰子の葉蔭に身を包まれて、清新快活なる大宇宙の子となつた。友とするものは一卷の聖書のみ、しかもそれに依つて天涯孤客の慰安を得るには十分であつた。境遇が變り、生活が變り、見るもの、聞くもの悉く新になれば、人の身は自ら生れ更つたやうにならざるを得ない。かくて病は數年ならずして癒え、體質は一變して、土人にも劣らぬ頑丈なものとなつたのである。

その間に、彼は一大事業を發見した。それはキムバレーといふ不毛の地に、千古空しく鎖されてゐた無

(一) Cape Colony.

限の寶庫、金剛石坑の開掘である。彼は萬難を排して此の事業に従ひ、忽にして一大成功を贏ち得て、巨萬の富を積み、偉大なる名聲を得た。かくて三十三歳にしてケープ殖民地の議員に選ばれ、一躍して首相となり、遂に南阿戦争を起して、南阿弗利加をして英國の範圍たらしめた。

彼は千九百二年、五十歳で世を去つたが、其の半生が頗る強健で、精力絶倫であつた事は、その成し遂げた事業を見ても知られる。永年彼の祕書役を勤めてゐたフィリップ・ジョルダン氏は、彼の私生涯を記して、

(二) Matabeleland.

「ローツ氏は異常な事業的才能を有し、一度重要な事件に對すれば、不眠不休、良成績を擧ぐる迄は已まなかつた。氏は他の優れた人人が五人で完成する事業を、一人で爲し得る非凡の頭腦を有してゐた」と記してゐる。且つ南阿戦争の際の如きは、熱沙の曠原に野營して、數日間、マタベル蕃族と對峙し得たのである。氏は實に南阿大英會社・デビアス合同金鑛會社・南阿合同大金鑛會社等の専務理事であると共に、南阿大陸電信建設中の難問題を解決し、兼ねて巨大なる農園・果樹園を經營し、他面には、政事家として千八百

九十年より七年間、ケープ殖民地の首相となり、首相
辭職後は、進歩黨の首領として該黨を總理した斯く
許多の大事業の爲に、毎日平均五十通からの手紙に
接したが、大抵は自ら披見した。而も英雄の胸中自ら
閑日月がある。彼は埃及・土耳其・伊太利の各地に遊び、
又日本の風光にも憬れてゐたといふ事である。

彼の遺した巨萬の財産は、その遺言に依り、「セシル・
ロイツ獎學資金」となつて、彼の生命を傳へ、彼の經營
した南阿の一角は、大英帝國無上の寶庫として、英國
今日の富を供給する一大要素となつて居る。

セシル・ロイツの半生の如きは、意志の力がよく健
康を左右し得べく、且つ人間の活力の殆ど無限であ
ることを示してゐるではないか。（近世立志編に據る）

二五 門生に諭す

諸君の如きは春秋に富み、材力に足る、若し懈らず
して日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れ
ども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、
ただ孜孜汲汲として勉めて息まざるにありぬべし。
もし悠悠として日を涉り、一旦年老い、齡傾きて後、日

頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも何の益あるべき。即ち今、余が身の上にて候。されば古詩にも、

少壯不努力、老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も、

盛年不重來。一日難再晨。及時當勉勵。歲月不待人。

といへば、古人もこの感懐を同じうすとぞ見ゆる。こ

れ等の詩句、時時吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。

又、世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。

日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

名は潛。晉の詩人。(〇三五―〇八七)

朱熹。宋の大儒。(一七九―一八六)

晉人。陶淵明の曾祖父。

言簡にして意も明白なり。折節打誦して自ら警むるによかるべし。それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり、

大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢、生無益於時、死無聞於後、是自棄也。

といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思はる。凡そ人と生れて學に志ありといふきはの、生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ちはてんはいと口惜しかるべきことなり。され

ば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激勵して、日夜勤
勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶと雖も、また急迫なるを嫌ふ。
兔角、一生ここを離れぬことなれば、急迫にして求む
べきにあらず、ただ懈を戒めて常に聖賢の書に優游
涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余、昔、加賀
にありし時、士族の中に紹鷗^(二)・利休^(一)が風流を慕ひて茶
湯を好む者あり。江戸に行役する時、道中茶具を持し
て、逆旅にても釜をかけ、炭をおきて、樂しみとしける
を、同行の人見て、「いかに好けばとて、道中にては止め

^(一)武野氏。利休の
茶道の師。
^(二)千宗易。茶道千
家流の祖。
(三八一三三)

よかし」といへば、その人いふは、道中とて一生の外に
あらばこそ、これも一生の日數の中なれば、わが茶湯
をする日にあらずといふ事なし。家にあると何ぞ異
ならん」とて、その後も止めざりき。學者の道に志すも
この人の茶湯を好むが如くなるべし。(室鳩巢一駿臺雜話)

二六 金米糖の壺

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄を
はじめ、町役家持の人人、一同に座に着きますると、さ
まざまの馳走がある。時にお年寄は、酒と聞いては笹

の露にも酔ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにして居られると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりともお取り下され」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つて來る。座中も、「これはよいお心づき、ひらにお菓子を召しあがれ」と勸めると、年寄もわるうはなし、「然らば頂戴を致しませう」と、壺を引きあげ、手首を突っこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。

どうぞして抜けるかと、色色にこじまはして見ても、引つぱつて見ても抜けず。まごまごして居られると、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや、手が少しつまりましたして、思ふやうに抜けませぬ」と、眞顔になつて言はれる。「それはお氣の毒。私が壺を持つて居りませう、無理無態に手をお引きなされ」と、一人が向ふへ廻つて、壺をつかまへ、後へ引くと、年寄は手を前に引く。互に「えいや」と引きあふ有様、景清と美保谷が鋤曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなかなか笑はず、泣顔になつて、「どうも痛んで抜けま

悪七兵衛景清
美保谷十郎

せぬ」といふ。さあ、これから大騒になり、「醫者どのを呼んで來い。骨接ほつぎではゆくまいか」と、酒宴の興も醒めはてました。

*
名は光。字は君
實。溫公は諡。
宋の名相。

時に、五人組が一人進み出て、「いづれもお騒ぎなさるな。われら承つたことがある。昔、司馬溫公すいまおんこうと云ふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投げつけましたれば、壺は割れて、はまつた小兒

は不思議に命を助かりました」と、或人の話ぢや。今、お年寄の御難澁は此の話に能う似てある。いざや、われらが司馬溫公となつて、たとへば、その古染附の壺が失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手をつき出すと、ただ一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖がちらかつて、雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄お助りなされたか」と、その手を見れば、抜けぬこそ道理、金米糖を一杯攫んで居られたと申すことぢや。な

んと可笑しい話ではござりませぬか。

攫んだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度攫んだら、首がちぎれても放すまいと、片意地な生れつき。それで、自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば、錢金の事のやうなれど、攫むものはこればかりではない。器量のよいのを攫み、賢いを攫み、負けをしみを攫み、家柄を攫み、身代のよいのを攫んで、放すまいとかづき歩くによつて、教を聞くこともならず、樂をすることもならず、愼も出來ず、せん方なさに、癢氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで

紛らしたり、さりとしては氣の毒なものでござります。壺割つてしまつてからは、何と云つても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。(柴田亭一鳩翁道話)

二七 俳人一茶

虱狩を半途で止めた古布子を、ばつばつと二三度振つた儘、直に引懸けて出かけようとす。一茶の袖を、名主の嘉右衛門は一寸控へて、「も一つ俺の願ぢやが、何と言つても先は百萬石の加賀様ぢや。其方も何

時もの氣象を止めて、少しは御機嫌取に、體の好いお世辭でも言ふやうにして貰へまいか」あははは、これはまた異なお頼みぢやな。併し、外ならぬ名主殿の事ぢや。思ひ切つてやりませうよ。有り難い、有り難い。いつもその様に素直に言つて下さると、其方も好いお人ぢやがな。』ははは、お前様も亦、いつもその様に腰が低いと、好い名主殿ぢやがな。』

一茶は皮肉に笑ひながら、敝衣垢面、佝僂で跛の醜い姿を恥づる色もなく、平然として、嘉右衛門と一緒に歩いて本陣へ向つた。

本陣には、梅鉢の紋打つた幕を張渡し、盛砂に打水、高張提灯、儀容堂堂として百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外に打寛いだ體で一茶を引見した。嘉右衛門は無論御前へは出られなかつた。

蛙たかひ
瘦かへるまけ
るな一茶是に
有 俳諧寺

蛙
瘦かへるまけ
るな一茶是に
有 俳諧寺

蹟筆茶一林小

「其方が一茶か。よう參つた。豫て風流の名は聞いてゐたが、抑、俳味とはどんな事ぢやの。」一茶は畏るる氣色もなく膝を進めて、「俳諧の道は孔釋の道と同じでござる。今の俳諧をいふものは、ただ題を得て發句を

作るだけの事、共に談ずるには足りませぬ。左様か、して其方の俳諧はどうぢやの。山水風月、皆これ俳家生涯の事でござる。心の赴く儘に發するのが、即ち自然の俳諧でござつて、巧まぬものこそ最も俳味は濃かてござらう。尸位素餐の輩に、眞に俳諧が解らう道理はござりませぬ。と、傍若無人の放言に、席に在るものは色を變へたが、侯は却て莞爾として、齒に衣着せずよく申した。聞きしに違はぬ其方の器量、予はその意氣が氣に入つたぞ。あはは、恐れ入ります。これ、一茶に膳部を取らせよ。と、やがて搬ばれた膳部に對して

も、一茶は何の遠慮もなく、心の儘に酒を飲み、肴を荒した。次いで引出物として、時服二領を下された。一茶は一寸考へてゐたが、にやりと笑つて、有り難く頂戴仕ります。ではこれでお暇を。左様か、大儀であつたの。

一茶は御前を下らうとして、ふと何故か躊躇した。「どうぞ致したか。いや、飛んだことを失念致しました。高貴の御前へ出たら、必ず追従を申すやうにと、折角、名主に頼まれて參つたのに、頓と忘れて居りました。改めてお世辭を申し上げます。」と、一茶は眞面目に、額

の汗を拭きながら低頭した。

「あつははは、面白い事を申す。その罰として一句吟まぬか」

子供迄のんのうと呼ぶ梅の花。

一茶としては珍しく、如才のない句であつた。

上首尾で本陣を出た一茶は、拜領の衣服を抱へて、別に嬉しい顔もせず、例の怪しい步調で、飄飄と庵室へ立歸つた。

噂を聞いて庵室に集まつてゐた門人達は、師匠の姿を見ると飛んで出て迎へた。

「お歸りなされませ。御前の首尾は如何でござりました。首尾は別に何ともない。おお、拜領物でござりませうか。さ、私がお持ち申しませう。いやいや、それには及ばぬ。一茶は何と思つたか、すぐには家に入らず、ぐりりと廻つて脊戸へ出ると、抱へてゐた衣服を包の儘、前の田圃へ、惜氣もなく投棄した。

「やれまあ、何をなさるのぢや。用もない衣服を棄てたまでぢや。でも折角加賀様から下されたものを。いや、それだから棄てたのぢや。抑、貰つて來るといふ事が厭なのぢやが、貴人の前で辭退すると、あれ見よ、一

茶は内心では欲しがつてゐる癖に、故と無慾を衒ふのぢや」と、世上の口が煩いから、暫く假に受けたまでぢや。かうして丁了へば先でも氣が濟む、俺も安心ぢや。さあ家に入つて、澁茶でも飲みなされ」と先に立つて引返しなから、振向いても見なかつた。

庵に入ると、早速、硯を引寄せて墨を磨り、塵紙の皺を伸ばし、秃筆を嚙んで、

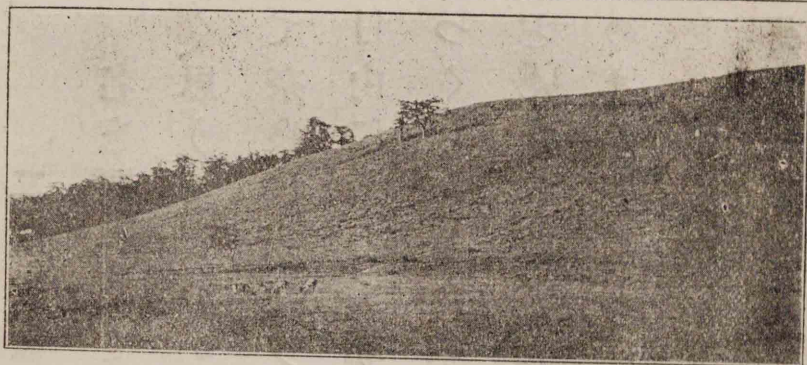
何のその、百萬石は笹の露。

と書いて見せた。門人は顔を見合せた。（名人崎人に據る）

二八 嫩草山

*旅籠の名。

名を聞いてさへ優にやさしい嫩草山は、見て美しく、思つてなつかしい山である。八年前の十一月初めて奈良に來た夕、三景樓の二階から、紺青にけぶる春日山に隣して、貂の皮で包んだやうに暖かさうな、ふつくらとした嫩草山の美しい姿を見た時、余の心はどんなに躍つたであらう。丁度逃へたやうに、十五夜のまん圓な月が其の上に出て居た。併し、其の時は遠しい旅で、山に登ることも果さなかつたが、今初めて其の懷を辿るのである。



嫩草山

霜枯れそめた矮い薄や刈萱や、他の枯草の中を、人が踏みならした路が幾條か麓から頂へ通うて居る。余等は其の一つを傳うて登った。

打見たよりも山は高く、思つたよりも路は急に、靴の裏は滑りがちで、約十五分を費して登り果てた時は、額も背も汗ばんで居た。頂はやや平坦になつて、麓からは見

えなかつた絶頂が、まだ二重になつて後に控へて居る。唯一つある茶店は、最早店をしまひかけて、頂には遊客は一人もなかつた。

余等は額の汗を拭うて、嫩草山の頂から、大和の國の國見をしようとして眼を放つた。夕方である。日は既に河内の金剛山と思ふあたりに沈んで、一抹、殷紅色の残照が西南の空を染めて居る。西、生駒、信貴、金剛山、南、吉野から、東、塔の峯、初瀬の山山は、大和平原をぐるりと圍んで、蒼蒼と暮れつつある。この暮山の屏風に包まれた大和の國原には、夕けぶり立つ紫の村、黄

ばんだ田、明るい川の流、神武陵、法隆寺、千年二千年の昔あつたもの、今生きてゐるものの總てが、夜の安息に入る前に、日に名残を惜しんで居る。直ぐ後の方で、がさがさと草が鳴つたと思つたら、夕空に映つて、大きな黒い影が二つぬうつと立つて居る。それは鹿であつた。

足の下で、奈良の町の火が美しくつき出した。蜂の群のつぶやきの様な人聲物音が響く。ぼうんと、麓の方で晚鐘が鳴りだした。その鐘の音に促されるかのやうに、鴉が啞啞と鳴いて、山の暮から野の黄昏へと

飛んで行く。

余等は今一度眼を平原に放つた。最早日の名残も消えて、眼に入る一切のものは蒼い靄に包まれた。大和は今暮れるのである。(徳富蘆花)

二九 自然の愛

慈愛深き母の懷に養はれたる子は、生涯其の恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美・溫雅なる山川は常に臉上に愛を湛ふ

るがごとし。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるる者は愛に酬いざるを得ず。天然の大公園に棲むわが國民が、その一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品も翫具も數ふるに足らず、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅、*カンテラの光に映えて水しく鮮かなるを、中流以下の市民は、あれこれと買求めて座敷に飾り庭に植込む。裏長屋の道具の据ゑどころもなき窓前にも、稗蒔を作りて田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育てて優しき野趣を

* Caubeia.
この葡語の轉訛なりといふ。

樂しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて、自然を愛すること此の如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、またよく之を尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等は漫りに人工を加へずして自然を仰ぐ。この服従を以て屈伏といふ勿れ。屈服は他動的なり、悦服は自動的なり。屈伏するものは、不束なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは、從順なる兒孫が寛仁な

る家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念を其の間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花を愛する趣味の、いかに我等が西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美しきにあらず、花一輪の色の艶に香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峯に互り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝も其のままに、願はくはこれに置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上

にふり撒きて歡興を助くるに、一は床上の盆石盆栽に自然の大景を方寸に寄す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は色を重んじ、此は風致を主とす。西洋草花の多くは、其の葉に何の趣もなくして、其の花に妖艶の色あり。寧ろ我等の眼には毒毒しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、其の花に何の美しきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよたと、下蔭の蟲の音にもゆらく様、ますほの色の、やがて白くほほけて、霧に濡

れ風に靡く趣は、我が胸に染みて忘れられず。日本人が花を愛するは、其の外形にあらず、賦色にあらずして、其の風情にあり。直に自然の懐にわけ入りて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ、自然を愛し自然を尊ぶなれ。自然に親しむ事の深きは、これ日本國民の特性なり。藤岡東圃―國文學史講話

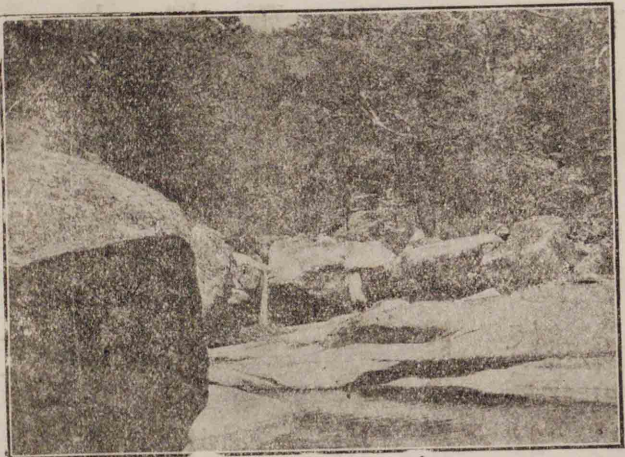
三〇 望軍臺

明鏡臺を過ぎて私達は靈源洞に入り、更に十數町にして靈源庵と望軍臺との岐路に達した。望軍臺へ

は此處から一里半もあり、且つ登りが峻しいため、大抵の登山者は其處までは登らないさうである。併し、臺上の風光は私の憬れて居つた一つであつたから、思ひ切つて望軍臺登りを試みた。

私は内金剛の代表的溪谷として萬瀑洞を推すに躊躇せぬけれども、密林に蔽はれた最も幽邃な溪谷としては、まづ靈源洞に指を屈せねばなるまい。別して彼の岐路から望軍臺の下、水簾洞に達する數十町の間、の峽谷は眞に幽邃の極致である。この峽谷には、絶頂から谷底まで、二丈三丈の大き

さを有する角の磨滅した巨岩が累累として横はり、これを支へる地盤は、流水の削磨作用によつて鏡の如く研出された花崗岩である。急湍は障碍物のない限り、その上を音もなく滑り、轉石に遮られては、或は激し、或は其の下を潛り、飛瀑ともなり、深潭ともなつて、千百の水の美觀を構成する。而も其の上は常に鬱蒼たる老樹に蔽はれて居るので、その幽邃は多分に神祕の色彩を加味して居る。時には陰濕な溪間を好む木蓮が、水に臨んで、大きな純白な花をつけ、溪中すべて其の香に満ちて居るのを見る事がある。



靈源洞

この山木蓮の花は、その一輪を手にとつて嗅げば、強烈な香に堪へぬほど鋭く嗅覺を刺戟するが、それが梢に咲いて居ると、えならぬ香氣を谷に漂はせて居る。幽徑に人なく、獨り水聲と禽語とを耳にする時、何處ともなく薫り來るこの妙なる香氣が、この谷に附與する靜寂の感じと縹渺たる氣分とは、その境に臨まぬものの容易

に想像し得ぬところであらう。

私達は溪流を離れて密林に入り、密林を出ては、また溪流を渡りつつ進んだ。樹木は主として樅・檜・榧・松・楓などであるが、斧斤の嘗て入らぬ、汚されない林で、下草には躑躅や大きな羊齒があり、多くは朽木・枯葉に埋れた中に、僅に山僧の通ふ細徑が覺束なくも通じて居る。往往、日の光を漏さぬ處があつて、太い葛蘿が大蛇のやうに垂れ、幾百千年の老木が自然に倒れ、古いものは形を留めぬまでに腐朽し、新しいものは谷に横はり、或は行手の道を塞いで居るなど、さなが

ら原始的風光で、踏んで行く落葉・枯葉の音にも、自然の私語を聞く心地がする。

この邊には、また縞栗鼠が多い。不意の侵入者に驚いて、半身を起しながら、木の枝や岩角から、ちつと私達を見守つて居る。時時、杜鵑は谷を掠めて啼きすぎ、山鳩の遠音も處處で聞かれる。

水簾洞までは餘程の登りて、其處に行くには可成りの難處を越えねばならぬ。併し、其處まで行きつければ、誰でも、行手に展開する美觀に思はず見惚れずには居られぬ。そこには二百尺程の長さに、約四十度の

傾斜面をなして居る白色を帯びた光澤のある花崗岩が、溪一杯の一枚岩となつてゐて、その上を浅い水晶のやうな水が四五尺の幅に波頭のやうな紋様を順次に畫きつつ、音もなく滑つて居るではないか。水簾の名が如何にもふさはしく、宛然、造化の手が小歇もなくそれを繰出して居るやうに見える。

水簾洞の邊から次第に望軍臺への登りになるので、登るに従つて道は益嶮峻を極めて来る。一時間を費して辛くも十町餘り攀登ると、少し下つた谷間に一つの廢庵が見える。私達は望軍臺への道が多少分

らなくなつて來たので、一まづ廢庵へ下りて見た。すると其處には昨日から泊つて居るといふ修道僧がゐて、臺上への道を委しく教へてくれた。

この庵は殆ど絶巔に近い高處にあるに拘らず、すぐ後に清水が湧いて居るので、私達はそれを貪り呑んだ上、辨當を開き、十分に休憩してから、紅空木ベニウキの密生する谷間を臺上目がけて攀登つて行つた。

六七町の難處を登ると、海拔四千四百尺を有する頂上の絶壁が削つたやうに突立つて、岩と岩との間から百尺以上もある長い鐵鎖が下つて居る。私は下

からそれを見上げた時に、果してその鐵鎖によつて此の削壁を登り得るであらうかと、まづ魂の戦くのを感じた。

望軍臺の絶壁は殆ど垂直面をなして突立つて居るので、百尺以上もある鐵鎖が急角度に仰視する懸崖から垂れて居る光景は、小さな人間に對する強暴なる威嚇である。同行の一人は、「危険だから登るのはお止しなさい」と頻に止めたが、此處まで来て居りながら、絶頂に上らないのは登山者としての耻辱であるといふやうな感じがするので、私は危懼の念に襲

はれながらも、勇を鼓して鎖に取りついた。その鎖はさまで太い物でないばかりでなく、針金で繕つたところさへある。で、それが果して安全に絶頂と連結されてあるかどうかも疑はれて、恐しく氣味が悪い。それでも一所懸命に攀登つて、辛くも絶頂に辿り着いた。

絶頂には、二三十人が一時に坐る事の出来る程の、稜角の取れた巨大な花崗岩がある。臺上に於ける囑目の偉觀は實に立派である。毘廬・聚香城・十王・地藏・白馬・日出・月出・長慶等の諸峯は、恰も望軍臺を花藥とす

る花瓣の如く、私達の四周に幾重にも環を描いて重疊し、驚くべき雄偉莊嚴の光景を呈して居る。その一を有するも、既に世に誇るに足るべき此等の山骨を露出した奇峯が、怪を競ひ、秀を争ひ、脈脈疊疊として眼界の及ぶ限り、煙の如く怒濤の如く大虚に連なつて居る光景は、ああ、眞に天下無雙の壯觀と稱すべきであらう。

私達は、人間の如何に小さく、自然の如何に偉大なるかを痛切に感じながら、再び鐵鎖をたよりに絶頂を下つた。この下りが上りに比して遙に困難で、私は

案内者がびつたり絶壁に身を凭せて先に下つて行く其の肩を足場とし、兩手で一心に鎖に縋りながら、やつと下りる事が出来た。ここから水簾洞までの下りは又極めて困難で、私は何度案内者の肩を足場に借りたか知れない位であつた。

私達はかの岐路まで引返して、それから靈源洞の本溪を靈源庵まで登つて行つた。十數町の登りであるが、これは望軍臺に比すべくもあらぬ平易な路である。段段、庵近くなると、谷が開いて明るみを増し、可憐な野生の櫻草がちらほら咲いて居る。愈、庵の傍へ

來ると、縷斗菜が見事に咲誇つて居る。其處にはまだ
蕾のままの百合の間間に、釣鐘草・華蔓草などの花を
見、木賊が到る處の叢に群生して居るのをも見た。

(菊地幽芳―朝金剛山探勝記)

校訂新撰國語讀本卷四終

齋藤製本

大正十年八月二十日 文部省檢定 中國語學科 校用

大正十年十二月六日 校訂再版發行
大正十年十一月三日 校訂再版發行
大正十年九月二十五日 校訂再版發行
大正十年一月十四日 校訂再版發行
大正七年一月十四日 校訂再版發行



著者 故佐々政一
相續者 佐々政男
補修者 大町芳衛
補修者 武島又次郎
補修者 杉敏介
發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社 明治書院
印刷者 東京市神田區錦町一丁目九番 株式會社 明治書院

發行所

東京市神田區錦町一丁目九番 振替貯金口座東京四九九一

株式會社 明治書院

電話 神田二三九八番

校訂新撰國語讀本(全十冊)	定價
卷一より各金四拾錢	大正十一年時
卷四より各金七拾六錢	大正十一年時
卷五より各金六拾參錢	大正十一年時
卷八より各金六拾參錢	大正十一年時
卷九、十各金六拾壹錢	大正十一年時

